

個体群生態学会会報

No. 66

2009年6月

ごあいさつ	(会長 巖佐 庸)	1
電子メールによる連絡体制の整備について (連絡とお願い)		2
個体群生態学会・第25回大会 (京都大会) のご案内 (京都 2009年10月17日～18日)		6
個体群生態学会・第24回大会 (東京大会) の報告 (東京 2008年10月18日～19日)		10
研究室紹介		
九州大学理学部数理生物学研究室 (巖佐研究室)		19
研究機関における個体群生態学分野の研究紹介		
国立環境研究所 環境リスク研究センター (五箇研究室)		22
産業技術総合研究所 生物機能工学研究部門 生物共生相互作用研究グループ (深津研究室)		25
事務局報告		30
Population Ecology 編集報告		37
会則		39
会員異動		41
編集後記		44

個体群生態学会

ごあいさつ

会長 巖佐 庸



このたびの選挙で会長になりました巖佐です。大串隆之前会長の後を受けて大串さんや運営委員の皆様にご教壇を譲りながら進めたいと思います。

事務長には、京都大学農学研究科の西田隆義さんをお願いしましたところ、快くお引き受けくださいました。前事務長の山内淳さんとの引き継ぎも順調に進んでいるようです。

以下に、個体群生態学会の運営方針について私が今考えていることを書き、会員の皆様の問題点などを教えていただきながらすすめていきたいと思います。

英文誌について：

大串会長のときに、日本学術振興会の刊行助成金の不採択にはじまった危機に対応するにあたり、個体群生態学会は非常に大きな決断を行いました。それは *Population Ecology* の専門誌としての力を信じて、刊行助成金の制度に振り回されないで学会運営ができる道を選んだということです。私もこの方針を堅持するつもりです。

幸いにして斎藤隆編集委員長のもとで *Population Ecology* は優れたジャーナルへの道を順調に進んでいます。Impact factor もほぼ2に到達し、近い将来に2.5へ、3へとさらなる飛躍を望むことも不可能ではない勢いです。

歴史を振り返りますと、日本での生態学分野での初めての英文誌、そして20年にわたりほぼ唯一の英文誌であった *Researches on Population Ecology* を発刊する組織として個体群生態学会はスタートしました。だから、*Population Ecology* が世界からも認められるよいジャーナルで

ある、というだけで学会の存在意義の半分は満たされるとさえ言えます。

国内の競争誌である *Ecological Research* が河田雅圭編集委員長のもとで標準的な生態学ジャーナルとしての地歩を固めつつあります。この状況下では、*Population Ecology* は日本で出版される1英文生態学誌ではいけません。世界から憧れをもって仰ぎ見られるような輝かしいジャーナルにならないといけないと思います。そしてそれは *Population Ecology* には可能です。そのために学会としても斎藤隆編集委員長を全面的にサポートし、また *Population Ecology* を求心力の核として個体群生態学会を盛り上げていきたいと思ひます。

大会の毎年化と会員のリクルート

嶋田正和さんのリーダーシップをもって大会の毎年化が進められています。とくに昨年の東京大会においては、若手生態学者の参加があり、会員のリクルートの道に希望が出てきました。2年に1度の泊まりがけのシンポジウムには良さもあり、この方針変更で個体群生態学会の特色が減ったと思う会員もおられますが、新しい路線によって個体群生態学会の会員の年齢構成をより望ましい形にしていく、そのことで将来の学会の発展を見込めるようになったと感じます。

今年は京都の同志社大学で大串さん・山内さんを中心に開催されます。皆様ぜひご参加ください。

今後、若手の生態学者に個体群生態学会に入ってきてもらうためには、どのような手段が考えられるか、運営委員の皆様

様ともよく相談して、良いと思った案は思い切って実行して行きたいと思います。なんとと言っても毎年の大会を若手にとって魅力的にすることが重要だろうと思います。若手の会員が自分たちの学会と感じられるように運営するにはどうするか、これに知恵を絞らないといけません。

これまでも学会の財政に関連して運営委員会で議論をしてきました。私の基本的な考えは、以下のようなことを当面の目標にしたいとするものです：

[1]年会費はできるだけ低く抑えてともかく会員になってもらう。また会員がやめるのを防ぐ。

[2]会員の会費は主に、学会組織運営の事務経費や最低限のランニングコストに用いる。

[3]英文誌 *Population Ecology* は、会員の会費は使わないで刊行できることを目指す。

[4]大会の開催については必要経費をカバーできるように参加費をとる。

[5]大会での非会員（外国人を含む）の招待旅費は、大会参加費や学会年会費ではなく、科学研究費などの別の経費で呼べるように工夫する。

運営委員の免役など

運営委員会のメンバーが少しずつは入れ替わっていますが、できるだけ若い世代の会員に個体群生態学会のことを考えてもらうためには、役員を定期的に入れ替える制度に変更する必要があると感じています。現在の運営委員は（私も含めて）かなりの年限に連続して役についている方がおられます。通常学会は2期（4年）をつとめるとそのあと1回は運営委員になれない、といった免役制度が導入されています。個体群生態学会もそのように選挙ルールを変更してはどうかと考えています。

また今回会長に選ばれたときに突然のことだったのですが、あらかじめ1期前から「次期会長」となっていれば、個体群生態学会のために何をすべきか一生懸命考える期間ができて望ましい気がします。これも、よく審議して皆様の賛同が得られれば進めたいと思います。

そのほかのこと

あと気になっているのが、法人化です。日本生態学会は法人化のための委員会を設けてかなり勉強し準備してきましたが、結局今すぐには踏み切れないという結論になったようです。国の学会関連の法人に関する法制度がどのようになるのか、他の学会がどうするのかなどを見極めながら、個体群生態学会も法人化のための準備をしないとイケないのではないかと考えています。これについては大串さんや山内さんに教えていただきながら進めて行きたいと思います。

また会員とのもっと直接的な意見の交換手段はないかどうか、ウェブサイトの充実、日本語のニュースレターのあり方、学会の経費区分について見直せないか、事務委託のあり方、年会費の値下げ実現の可能性など、が思いつきます。私はいまでもうまくいっているように感じていますが、必要があればさらに改善して行きたいと思っています。

その他にも個体群生態学会のこれからにとって対処しておかないといけないと思いつかれることがありましたら何でも、巖佐もしくは事務長の西田さん（nishida@kais.kyoto-u.ac.jp）までメールにて教えていただけますと幸いです。

よろしくお祈いします。

巖佐 庸
yohiwasa@kyudai.jp

電子メールによる連絡体制の整備について（連絡とお願い）

これまで、個体群生態学会の連絡は、おもに郵便や宅配便を利用して行ってきました。しかしながら、昨今、インターネットが急速に普及し、大学や研究機関に所属しない会員も、家庭で電子メール（以下、メール）が使えるようになってきております。

メールは、その性格上、連絡が迅速かつ安価に行うことができるという特徴があります。個体群生態学会でも、昨年からはメールによる連絡を中心に行えるように、会員各位に往復はがきに確認を行ってきました。しかしこの往復はがきの回収率が低く、この1年間は、重要な連絡に関しては従来通りに郵便や宅配便で連絡を行わざるを得ませんでした。

メールによる連絡は、迅速性・利便性ばかりでなく、予算の節約に関してもメリットが大きいため、2009年度の運営委員会で、より積極的に導入を促進すべきだという結論に再度達しました。

そこで、今後は、学会大会の案内など、メールで行うことが可能なものについては、基本的にメールで行うことにいたします。今後も、メールによる連絡ではなく郵便による連絡を希望する会員に関しましては、2009年7月31日までに、土倉事務所まで、書簡・FAXあるいはメールにてご連絡をいただけるようお願い申し上げます。

また、これから事務局では、会員のメールアドレスの整備を進めていきます。現時点で、メールアドレスが不明の会員は別表の通りです。該当会員におかれましては、メールアドレスを事務局までご連絡いただけるようお願い申し上げます。今後、メールアドレスが不明の会員に対して、さまざまな形で連絡を取らせていただくことがあるかと思いますが、ご了承いただければ幸いです。また、メールアドレス帳の整備の過程で、メールアドレスが不明の会員氏名が、会員に対して公表されることがありますので、その点につきましても、ご了解いただけるようお願い申し上げます。

異動の連絡の際にも、メールアドレスのお知らせいただけるようお願いいたします。また、メールアドレスが変更になった際にも、(株)土倉事務所内 個体群生態学会まで、ご連絡いただけるようお願い申し上げます。

2009年10月の個体群生態学会・第25回大会まで、個体群生態学会からのメールが届かない会員におかれましては、メールアドレスの登録がうまくされてない可能性がありますので、土倉事務所まで、ご連絡いただけるようお願い申し上げます。

2009年6月

個体群生態学会事務長

西田隆義

メールアドレス登録のない会員

秋山 穰	田口 正男	遠坂 康彦
檜山 義明	西村 昭治	下野 綾子
池田 清彦	上田 哲行	三木 健
石田 昇三	山口 勝幸	熊澤 風雅
加藤 勉	吉川 研二	小久保 醇
岸 由二	大久保 利道	西村 登
小林 克実	末永 博	三代 隆洋
近藤 正樹	高橋 智	島田 展人
久保 浩洋	高橋 久	西原 昇吾
久野 英二	丹羽 真一	島田 卓哉
水田 國康	渡慶次 睦範	大西 修平
仲盛 広明	稲富 善愛	蠟山朋雄
中村 浩二	横山 潤	田中 誠二
二宮 穰	立田 晴記	荒木 仁志
西山 伊和禰	山中 武彦	寺本 悠子
野間口 真太郎	千葉 聡	富山 清升
桜谷 保之	岡村 寛	
鈴木 邦雄	坂田 はな	

登録のあるメールアドレスに不達の会員

杉浦秀樹	中尾史郎	横山潤
天野洋	田上義明	

メールアドレスの登録はあるけれども ML へこれまで登録されてなかった会員

(2009年7月31日までに会員から土倉事務所へ連絡ない場合には、自動的にMLへ登録いたします。登録メールアドレスの変更のある場合にも、連絡をお願いします。)

新垣 則雄	松村 正哉	宇田川 徹
中鉢 龍一郎	松良 俊明	可知 直毅
藤田 和幸	宮井 俊一	高田 宜武
藤山 静雄	宮下 直	東 正剛
五嶋 聖治	村上 興正	佐山 勝彦
郷右近 勝夫	野村 哲郎	日鷹 一雅
萩原 秋男	奥村 隆史	尾崎 研一
長谷川 博	大野 和朗	井上 大成
林 文男	齋藤 裕	吉村 仁
市川 俊英	酒井 光夫	武田 博清
市野 隆雄	杉本 毅	酒井 聡樹
今井 長兵衛	鈴木 惟司	濱口 京子
梶田 泰司	武石 全慈	岩崎 敬二
粕谷 英一	富山 清升	渡辺 良朗
川崎 廣吉	椿 宜高	大西 尚樹
河野 勝行	山本 道也	梶 光一
草野 保	山中 正博	五味 正志
益子 計夫	河田 雅圭	箕口 秀夫

山平 寿智
吉永 龍起
田中 克彦
立田 晴記
山中 武彦
千葉 聡
岡村 寛
高倉 耕一
小路 晋作
坂田 はな
遠坂 康彦
清水 健
向坂 幸雄
中桐 斉之
本間 淳
下野 綾子
三木 健
熊澤 風雅

伊藤 嘉昭
川那部 浩哉
小久保 醇
西村 登
小野 勇一
三代 隆洋
島田 展人
西原 昇吾
辻野 昌広
門脇 浩明
島田 卓哉
大西 修平
蠟山 朋雄
伏見 昭秀
細川 貴弘
佐竹 暁子
赤坂 宗光
林 成多

川添 のぞみ
岸田 治
森 秀仁
田中 裕美
宮崎 佑介
山口 和香子
北村 孔志
滝 若菜
服部 充
原野 健一
田中 誠二
森口 紗千子
寺本 悠子
森田 健太郎
浦口 宏二
穴澤 正宏

個体群生態学会・第25回大会のご案内

大会委員長・大串隆之（京大・生態学研究センター）

日程

2009年10月17日（土曜日）・18日（日曜日）

会場

同志社大学寒梅館（<http://www.doshisha.ac.jp/information/facility/kanbai/>）
京都市上京区烏丸通上立売下ル

参加申し込み

参加登録および一般講演（ポスター発表）の申し込み等については、以下のウェブサイトをご覧ください。

http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/shimada-lab/Popul_Ecol-2009/

プログラム

10月17日（土曜日）

9:30-12:30：運営委員会

10:00より：参加受付

12:45-14:45：公募シンポジウム2件（2会場）

15:00-17:00：公募シンポジウム2件（2会場）

17:15-18:00：総会

18:10-18:50：奨励賞授賞式および授賞講演

19:00：懇親会

10月18日（日曜日）

9:00-12:15 一般講演（ポスター発表）

10:30-12:15 コアタイム

午後 ポスター賞発表（企画シンポジウム会場）

9:00-10:30 秋の学校「入門 ゲノムと生態系を結ぶ」

入門 遺伝子から見た適応 工藤洋（京大・生態研）

入門 生態系ゲノミクス 大串隆之（京大・生態研）

13:30-17:30 企画シンポジウム

「**Linking genome to ecosystem**（ゲノムと生態系を結ぶ）」

Ecology, genetics, and evolution of species interactions

Marc Johnson (North Carolina State University)

Linking evolution and community structure of herbivorous insects: a key role of induced plant responses

Shunsuke Utsumi (Kyoto University)

Microbial function and diversity in the fluid of pitcher plants

Yayoi Takeuchi (Kyoto University) · Kentaro Shimizu (University of Zurich)

Ecosystem consequences of genetic diversity

Jennifer Schweitzer (University of Tennessee)

Interactions among plant, soil, and microbes: how microbial diversity and function in soil govern ecosystem processes

Shinpei Yoshitake (Waseda University)

問い合わせ先

椿 宜高

京都大学生態学研究センター

TEL: 077-549-8234

ytsubaki@ecology.kyoto-u.ac.jp

申し込み

【公募シンポジウム】

本大会では4件の公募シンポジウムを開催します
個体群生態学の発展に寄与しうる企画のご提案をお待ちしています
応募された企画の中から、4件を実行委員会が採択します
公募シンポジウムの応募の要領は以下の通りです

・以下の内容を pe09_sympto@ecology.kyoto-u.ac.jp までメールでご連絡下さい

- | | |
|-----------------|-------------|
| (1) 企画者 | (2) タイトル |
| (3) 概要 (200字以内) | (4) 発表者 (案) |

- ・メールのタイトルは「09 個体群公募シンポ」として下さい
- ・応募の締め切りは2009年7月18日(土)です
- ・採択結果は2009年8月上旬に企画者まで通知いたします

【参加・講演申し込み】

《参加・講演の申し込み》

本大会ではポスター発表による一般講演を受け付けます
一般講演を行なえるのは、2009年度の会費を納入した個体群生態学会の

会員のみです

ポスター発表では、若手研究者の希望者を対象にポスター賞の審査を行ないます

申し込み要領は以下の通りです

- ・以下の内容を pe09_regist@ecology.kyoto-u.ac.jp までメールでご連絡下さい

- | | |
|------------------|-------------|
| (1) 申込者氏名 | (2) 申込者所属 |
| (3) 一般・学生の別 | (4) メールアドレス |
| (5) 懇親会参加の有無 | (6) 講演タイトル |
| (7) ポスター賞審査希望の有無 | |

- ・メールのタイトルは「09 個体群申し込み（発表あり）」として下さい

- ・参加・発表申し込みの締め切りは 2009 年 8 月 22 日（土）です

発表要旨は以下の要領に従ってご連絡下さい

- ・以下の内容を pe09_abs@ecology.kyoto-u.ac.jp までメールでご連絡下さい

- | | |
|----------------------------|-----------|
| (1) 申込者氏名 | (2) 申込者所属 |
| (3) 講演タイトル | |
| (4) 講演者氏名・所属（発表者の左に○印をつける） | |
| (5) 要旨（500 字以内、テキストのみ） | |

- ・メールのタイトルは「09 個体群講演要旨」として下さい

- ・参加・講演申し込みの締め切りは 2009 年 8 月 22 日（土）です

《参加のみの申し込み》

申し込み要領は以下の通りです

- ・以下の内容を pe09_regist@ecology.kyoto-u.ac.jp までメールでご連絡下さい

- | | |
|--------------|-------------|
| (1) 氏名 | (2) 所属 |
| (3) 一般・学生の別 | (4) メールアドレス |
| (5) 懇親会参加の有無 | |

- ・メールのタイトルは「09 個体群申し込み（発表なし）」として下さい

- ・メールでの参加申し込みの締め切りは 2009 年 9 月 19 日（土）です

- ・締め切り以降は会場での当日参加のみ受け付けます

- ・懇親会の当日受付はできかねますのでご了承下さい

【大会参加費・懇親会費】

2009 年 7 月 31 日（金）までの振り込みについては、割引料金を適用します
《2009 年 7 月 31 日（金）まで》

・参加費

会 員： 一般 6,000 円、学生 4,000 円

非会員： 一般 7,000 円、学生 4,000 円

- ・懇親会費
 - 一 律： 一般 5,000 円、学生 3,000 円
- 《2009年8月1日（土）以降》
- ・参加費
 - 会 員： 一般 6,500 円、学生 4,500 円
 - 非会員： 一般 7,500 円、学生 4,500 円
- ・懇親会費
 - 一 律： 一般 5,500 円、学生 3,500 円

大会参加費・懇親会費の振り込みは以下の通りお願いします

- ・以下の口座に振り込んで下さい
 - 金融機関名：ゆうちょ銀行
 - 口座番号：00960-1-271623
 - 口座名義：個体群生態学会大会 2009
- ・通信欄に「参加費」「懇親会費」を明記して下さい
- ・振り込み手数料はご負担下さい
 - ・振り込みの締め切りは2009年9月19日（土）です
 - ・締め切り以降は会場で当日参加としてお支払い下さい
 - ・懇親会の当日受付はできかねますのでご了承下さい

個体群生態学会 第24回大会（東京）の報告

大会実行委員長・嶋田正和

個体群生態学会第24回大会は、これまでの合宿形式を止めて、ホテルから通う形式の最初の年次大会となった。2006年から立ち上げた将来計画委員会（座長：嶋田）の答申を受け、運営委員会は交通の便が良い東京圏と京阪神地域を交互に会場を設定する案を進めてきた。本学会としては初めての年次大会だったので、国内会員数400名程度の小規模学会でどれくらいの参加者が見込まれるかすらも予備情報は何もなかった。すべてが、手探り状態からスタートしたのである。

しかし、小まめに全国規模のメーリングリストなどに第24回大会の案内や企画を流したので、当日には210名を越す参加者が押しかけ、テンヤワロンヤのうれしい悲鳴があちこちで聞かれた。受付デスクでは210部納入された「大会プログラム・講演要旨集」がすべて尽きて、急遽、会場系の院生アルバイトには配らずに、外部の参加者優先で回して何とか凌いだ。また、1日目の懇親会の会場であった東大農学部生協カフェテリアは芋を洗う混雑で、これも予想を上回る参加者であった。さらには、一般講演（ポスター発表）の申し込みが最初は低調だったが、締め切りを延長してポスターボードの残り枚数を案内したために、駆け込みで一挙に申し込みが殺到し、最終的には66件にも達した。

このように大会は盛況のうちに幕を閉じた。大会収支決算では黒字が40万円に達し、これは参加者からの浄財として、ありがたく学会本体に寄付させて頂いた。個体群生態学会は機関誌 *Population Ecology* の科研費・成果公開促進費（出版助成）が不採択になったため、ここ数年は緊縮財政を強いられている。東京大会も、学会本体からの準備金はゼロであることを承知で大会事項委員会は引き受け、海外からの招聘研究者の旅費は、嶋田と松田裕之氏の研究予算から支払っている。魅力ある企画をたくさん走らせて非会員の学生や若手研究者を本学会に多数リクルートしたい、それによって学会本体の財政を少しでも助けたい、という一心で運営した大会のように思う。

一方で、展示販売のブース配置では出版社に大いに不満の残る結果となってしまう、申し訳なかった。展示販売ブースは農学部1号館の受付から少し奥まった廊下に配置したのだが、これが見込み違いだった。蓋を開けてみると、大多数の参加者はそちらには全く流れず、企画シンポ会場の2号館と一般講演（ポスター）会場の7号館の方に流れてしまった。大会が終わってから、展示用テーブル料金の半額を出版社に返金する措置を取って謝意を表した。これは次回以降の反省と申し送り事項にしたい。

最後に、何の実績もなく予備情報もない最初の年次大会に向けて、東京圏の学会員が積極的にアイデアを出して東京大会を盛り上げた大会実行委員会の情熱とエネルギー、そして200名以上の参加者のご協力に、深く感謝したい。

- ・会期：2008年10月18日（土）～19日（日）
- ・会場：東京大学農学部（東京都文京区弥生）
- ・大会実行委員会：嶋田正和（東大・総合文化、委員長・総括・秋の学校担当）、松田裕之（横国大、企画シンポ）、宮下直（東大・農、会場係・企画シンポ）、鎌田直人（東大・農、会場係・懇親会司会）、吉田丈人（東大・総合文化、会計係）、

瀧本 岳 (東邦大、講演要旨集係)、伊藤 洋 (東大・総合文化、宣伝ポスター・大会HP係)、長瀬泰子 (東大・総合文化、嶋田研学術支援職員、参加受付・名簿作成)

■基調シンポジウム

【S1】 Rapid Adaptation: From Learning and Plasticity through Population Dynamics to Evolution

Organizer: Masakazu Shimada (Department of Systems Sciences, University of Tokyo)

S1-01 **Evolutionary Ecology of Learning** Tadeusz J. Kawecki (Department of Ecology and Evolution, University of Lausanne, Switzerland)

S1-02 **Parasitoid's learning and switching predation enhance persistence in a two-host one-parasitoid experimental system** Yumiko Ishii (Department of Systems Sciences, University of Tokyo)

S1-03 **Linking individual responses and ecological community: Adaptive phenotypic plasticity in larval amphibians** Osamu Kishida (Center for Ecological Research, Kyoto University)

S1-04 **The impacts of adaptive patch choice and of evolutionary change in choice behavior on interspecific interactions** Peter A. Abrams (Department of Ecology & Evolutionary Biology, University of Toronto, Canada)

■大会企画シンポジウム

【S2】 個体群と生態系のリスク管理：陸と海の最前線

企画者：仲岡雅裕 (北海道大)、堀正和 (水産総合研究センター)、松田裕之 (横浜国大)

共催：横浜国立大学グローバルCOE「アジア視点の国際生態リスクマネジメント」

S2-01 生態系機能の広域評価に基づく瀬戸内海のアマモ場再生プラン 堀 正和 (水産総合研究センター)

S2-02 上位捕食者の個体群保全：生息環境モデルを用いたオオタカ保護区の抽出方法 尾崎 研一 (森林総合研究所)

S2-03 系外資源流入の年変動を考慮した外来種管理 *亘 悠哉 (森林総研・学振特別研究員 [PD])、阿部 慎太郎 (環境省那覇自然環境事務所)、山田 文雄 (森林総研関西)、宮下 直 (東大農)

S2-04 **Fishing and variability of exploited fish populations** 謝 志豪 (国立臺灣大學)

S2-05 生態リスク管理におけるアジア視点—知床世界遺産におけるシカとトドの管理 松田 裕之 (横浜国大)

【S3】 景観構造が決める個体群・群集の構造と動態

企画者：宮下直、角谷拓 (東大・農)

S3-01 カワトンボの翅色多型の動態を決める景観構造 角谷 拓 (東大・農)

S3-02 マトリクスの透過性が決めるメタ個体群の存続性 黒江 美紗子 (東大・農)

S3-03 景観構造に依存したセイヨウオオマルハナバチと在来マルハナバチの種間相互作用 石井 博 (富山大・理)

S3-04 送粉系から見たランドスケープフェノロジーの重要性 工藤 岳 (北大・地球環境科学)

S3-05 河川の合流が生み出す生態学的プロセス 大澤 剛士 (神戸大・人間発達)

■公募式シンポジウム

【S4】社会性昆虫学の来た道、行く道

企画者：松浦健二（岡山大）、土畑重人（東大）

S4-01 ブレイクスルーは個体群生態学にあり 辻 和希（琉球大学農学部生産環境学科）

S4-02 これからがシロアリ進化生態学の熱い時代 松浦 健二（岡山大学大学院環境学研究科）

S4-03 社会性昆虫の孕むevo-devo的課題 三浦 徹（北海道大学大学院地球環境科学研究科）

S4-04 「社会性昆虫」学を越えて：階層性を作り出す利己的遺伝子と自己組織化 土畑 重人（東京大学大学院総合文化研究科）

【S5】進化生態学シンポジウム：生活史形質の種内変異—理論と実証—

企画者：山口幸（奈良女子大）、遠山弘法（九州大）、入江貴博（琉球大）

S5-01 小さい雄は成長するか？—フジツボ類の矮雄の成長パターンと生活史戦略— *山口 幸、尾崎 有紀（奈良女子大学大学院）、遊佐 陽一（人間文化研究科）、高橋 智（奈良女子大学・理学部）

S5-02 花粉制限を考慮した植物の性配分モデル 江副 日出夫（大阪府立大学大学院理学系研究科生物科学専攻）

S5-03 スミレ属2種における種内変異の進化 * 遠山 弘法、矢原 徹一（九州大学理学府生物学科・生態科学研究室）

S5-04 イチモンジセセリにおける繁殖形質の個体群間変異：移動のコストは小卵多産をもたらすのか？ 世古 智一（農研機構・近中四農研）

S5-05 休眠のコストと餌の制約が引き起こす生活史形質の世代間・集団間変異 * 定清 奨、石原 道博（大阪府立大学大学院理学系研究科生物科学専攻）

S5-06 ブドウガイにおける繁殖形質の可塑性：水温と餌の影響 *尾崎 健太郎、和田 哲（北海道大学大学院水産科学研究科）

S5-07 温度-サイズ則の進化：生活史パズルの一般解を求めて 入江 貴博（琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底実験所）

【S6】軍拡競争：コンフリクトと逃げる・追いかける進化

企画者：津田みどり（九大・生防研）、川平清香（総研大・先導科学）、山道真人（総研大・

先導科学）、佐々木頭（総研大・先導科学）

S6-01 潜葉虫とその寄生蜂の間の拮抗関係：潜葉虫食痕パターンの防衛効果と食痕を辿る寄生蜂の寄主探索戦略 *綾部 慈子（名大・森林保護）、津田 みどり（九大・生防研）、望月 敦史（理研）

S6-02 同調しない共進化による種分化 細 将貴（東北大学大学院・生命科学研究所）

S6-03 みんなで渡れば怖くない？—右巻きから左巻きへの交差点 *山道 真人、佐々木 頭（総研大・先導科学）

S6-04 アズキゾウムシにおける雌雄間のコンフリクト：再交尾はやっぱりコスト？ *櫻井 玄（九大・農・生防研）、粕谷 英一（九大・理・生物）

S6-05 交尾を拒絶するメスと追いかけるオス：性的コンフリクトに基づく集団間の分化と生殖的隔離の可能性 *秋元 信一、菅野 良一、佐々木 有香（北海道大学大学院農学研究院・昆虫体系）

S6-06 いやがる雌と意地悪な雄：性的軍拡競走モデル *川平 清香、佐々木 顕
(総研大・先導科学)

[S7] 分子生物学的アプローチで解き明かす生態と進化

企画者：細川貴弘 (産総研・生物機能工学)

S7-01 分子系統樹を道標とした適応形質の探索：東アジア産チャルメルソウ節をモデルとして 奥山 雄大 (財・岩手生物工学研究センター)

S7-02 内部共生系への細菌遺伝学的アプローチ：ホソヘリカメムシ-*Burkholderia* 共生系をモデルに 菊池 義智 (産業技術総合研究所 生物機能工学研究部門)

S7-03 社会性アブラムシにおける兵隊特異的な攻撃毒プロテアーゼ 沓掛 磨也子 (産業技術総合研究所 生物機能工学研究部門)

S7-04 トコジラミにおける細胞内共生細菌*Wolbachia*の体内局在と宿主適応度への影響 細川 貴弘 (産業技術総合研究所 生物機能工学研究部門)

秋の学校「迅速な適応性の解説」

適応進化が基盤となり、その上に、学習や表現型可塑性による生物間相互作用を介して個体群動態がさまざまに変化する。その過程を分子・細胞からダイナミク

スまで解説する。講師：嶋田正和 (東大・総合文化・広域科学)

■一般講演 (ポスター発表)

P1-01 衛星追跡と個体数調査によるカワウの季節移動の解明 (高木憲太郎 NPO法人バードリサーチ)

P1-02 出現時期多型とその分布は温暖化の影響を受けているか (大塚公雄 京都大学農学研究科応用生物科学専攻昆虫生態学分野)

P1-03 アリー効果が格子空間上の集団に与える影響について (佐藤一憲 静岡大学工学部システム工学科)

P1-04 ケショウヤナギの小集団における花粉移入と散布様式 (永光輝義 森林総合研究所北海道支所)

P1-05 稀少種の絶滅プロセスを解明—ハタベカンガレイ— (北村孔志 静岡大学工学部)

P1-06 イワフジツボの局所個体群動態を決定するパラメータの季節性と空間変動 (深谷肇一 北海道大学大学院環境科学院)

P1-07 エッジ効果が格子モデルに与える影響の検証 (渥美良太 静岡大学)

P1-08 水田および水田水路におけるフナ稚魚の生残と移出 (小関右介 中央水産研究所)

P1-09 海洋のメタ個体群維持における人口学的確率性と移動の影響 (熊谷直喜 千葉大学大学院理学研究科)

P1-10 捕食者—被食者系の多層格子モデルによるサイズ効果の効果 (森秀仁 静岡大学大学院工学研究科システム工学専攻)

P1-11 エゾシカの餌資源制限による体重変動と個体群制御 (梶光一 東京農工大学)

P1-12 The effect of *Wolbachia* infection on life history traits and population dynamics in a moth (Zenobia Lewis 岡大院・環境・進化生態)

P1-13 越冬地と中継地におけるマガン個体群の遺伝的構造 (森口紗千子 東京大学生物多様性科学研究室)

P1-14 宍道湖・中海における準絶滅危惧種オオクグ(*Carex rugulosa*)の遺伝的多様性評価 (大林夏湖 島根大学汽水域研究センター)

P1-15 トノサマバッタ1齢幼虫の活動性の測定：測定条件の検討と個体群間の比較 (原野健一 農業生物資源研究所 昆虫・昆虫-植物間相互作用研究ユニット)

P1-16 トノサマバッタ*Locusta migratoria* の相変異：子の体サイズと相蓄積 (田中誠二 農業生物資源研究所大わし支部)

P1-17 サバクトビバッタにおける発育と繁殖形質にみられるトレード・オフ (前野浩太郎 農業生物資源研

研究所 バッタ研究室)

- P1-18 創出されたヨシ群落における絶滅危惧種ヒヌマイトンの個体群過程 (寺本悠子 筑波大院・生命環境科学研究科)
- P2-01 確率的パッチ選択、不完全情報、移動コスト: 理想自由分布モデルの現実的展開 (松村秀一 International Institute for Applied Systems Analysis, Austria)
- P2-02 異性間相互作用が性比に及ぼす影響: オスによるセクハラが働く場合の性配分モデル (川津一隆 京都大学大学院農学研究科昆虫生態学研究室)
- P2-03 捕食者遭遇経験がその後のハダニの行動に及ぼす影響 (奥圭子 中央農業総合研究センター)
- P2-04 干潟の蟹における非対称な囚人のジレンマの協力の進化 (稲垣絢子 奈良女子大学人間文化研究科)
- P2-05 捕食者や寄主と遭遇経験に基づく寄生蜂の学習反応: 食性幅の異なる寄生蜂種間の比較 ()
- P2-06 タガメにおけるオタマジャクシ食の利益 (大庭伸也 長崎大学熱帯医学研究所病害動物学)
- P2-07 鳥類育児寄生者のホスト乗換え仮説に関する数理的研究 (川添のぞみ 奈良女子大学大学院・人間文化研究)
- P2-08 森林の樹木の斉開花結実の進化: ギャップ動態の重要性 (巖佐 庸 九州大学大学院理学研究院生物科学部門)
- P2-09 周期ゼミの素数周期選択プロセスにおけるアリー効果の役割 (田中裕美 兵庫県立大学環境人間学研究科)
- P2-10 オオツノコクヌストモドキのオス間闘争における敗北経験の効果 (岡田賢祐 岡大院・環境・進化生態)
- P2-11 刷り込み遺伝子がsocial hybridogenesis における女王分化の遺伝的固定を促進しうる (土畑重人 東京大学大学院総合文化研究科)
- P2-12 餌探索における記憶の効果の研究 (堀部直人 東京大学大学院総合文化研究科)
- P2-13 異なった遺伝的背景がもたらす可塑的形質の変異 (幅 拓哉 信州大・理・生物)
- P2-14 真社会性アブラムシにおける防衛戦略としての兵隊の「数」と「質」(細田一史 大阪大学大学院情報科学研究科バイオ情報工学専攻 四方研究室)
- P2-15 種内捕食・被食系における被食者の可塑的防御形態 (井川拓也 北海道大学大学院水産科学院)
- P3-01 大腸菌を用いた人工相利共生系における適応的細胞状態遷移 (細田一史 大阪大学大学院情報科学研究科バイオ情報工学専攻 四方研究室)
- P3-02 大腸菌と細胞性粘菌の液体培養共生系の構築と相互作用の解析 (久保勲生 大阪大学大学院情報科学研究科)
- P3-03 アシナガグモ属における鋏角サイズの性的二型の種間変異とその進化パターン (馬場友希 東京大学大学院農学生命科学研究科生物多様性科学研究室)
- P3-04 Oscillation induces the evolution of homozygote incompatibilities in the lateral asymmetry genetics of fish (高橋 智 奈良女子大学人間文化研究科)
- P3-05 ハクセンシオマネキの左右性の遺伝システムのモデル (小林美苑 奈良女子大学人間文化研究科)
- P3-06 選択から開放された時計と低頻度で維持される遺伝相関 (宮竹貴久 岡山大学大学院環境学研究科)
- P3-07 性的対立における軍拡競走の個体群間交配による検出 (日室千尋 京都大学大学院農学研究科昆虫生態)
- P3-08 食害に対する植物の再生長反応がハムシの強い摂食選好性の進化を引き起こす (内海俊介 京大生態学研究センター)
- P3-09 表現型可塑性と急速な進化が個体群動態に与える影響と侵入可能性 (山道真人 総研大・生命共生体進化学)
- P3-10 *Callosobruchus*属における触角節数の集団内多型 (櫻井玄 九州大学大学院農学研究院 附属生物防除研究施設)
- P4-01 外来種に挑む4つの木馬: トロイ染色体個体による根絶の可能性 (原田祐子 中央水産研究所)
- P4-02 外来種4種を含む池沼における食物網構造 (三宅もえ 東京大学農学生命科学研究科)
- P4-03 頻度依存的な繁殖干渉が在来タンポポを駆逐する (高倉耕一 大阪市環境科学研究所)

- P4-04 繁殖干渉による外来種の侵入リスクの説明 (西田隆義 京大農昆虫生態)
- P4-05 Rapid specialization to invasive species by the parasitoid wasp *Cotesia glomerata* (L.) (田中晋吾 北大・農・昆虫体系)
- P4-06 局所密度を考慮した個体群管理に関する数理的研究: 根絶可能性に向けた捕獲努力量配分の検討 (秋田鉄也 横浜国立大学環境情報学府)
- P5-01 Life in miniature: competitive coexistence of spore-feeding beetles in a patchy, variable environment (門脇浩明 School of Biological Sciences, The University of Auckland)
- P5-02 適応的捕食と食物連鎖長 (近藤倫生 龍谷大学理工学部)
- P5-03 東京湾湾奥部の運河における魚類相の変遷とその要因 (宮崎佑介 東京大学大学院農学生命科学研究科生態システム学専攻保全生態学研究室)
- P5-04 共進化する捕食. 被食系において移動分散が食物網構造に与える影響 (山口和香子 東北大学生命科学研究科生態システム生命科学専攻 河田研究室)
- P5-05 シカ採食による植物の量と質の変化が植食性昆虫の季節動態に与える影響 (高木 俊 東京大学大学院農学生命科学研究科生物多様性科学研究室)
- P5-06 東北太平洋岸海域の底魚類における種内の分布-密度関係 (奥田武弘 (独)水産総合研究センター 東北区水産研究所八戸支所)
- P5-07 ザリガニによる生態系エンジニアリングが群集の動態と安定性に与える影響 (西嶋翔太 東大院・農・生物多様性科学)
- P5-08 琵琶湖周辺内湖における動物プランクトン群集 (山口真奈 京大学生態学研究センター)
- P5-09 オスが引き起こすマメゾウムシ2種の産卵場所分割 (岸茂樹 京大学生態学研究センター)
- P5-10 冷温帯のスギ林における地表徘徊性甲虫の日周期活動と種間相互作用 (滝 若菜 筑波大学大学院生命環境科学研究科保全生物学研究室)
- P6-01 個体ベースモデルの並列シミュレーション (皆藤千穂 奈良女子大学大学院人間文化研究科情報科学専攻)
- P6-02 じゃんけんモデルにおける有限サイズ安定解析 (齋藤文吾 静岡大学大学院工学研究科システム工学専攻)
- P6-03 生息地破壊が個体群動態に及ぼす影響のパーティティ則 (中桐齊之 兵庫県立大学環境人間学部)
- P6-04 Wilcoxon 符号化順位検定一見逃されている仮定 (粕谷英一 九州大学理学部生物学教室)
- P6-05 離散時間モデルにおける駆除/ 間引きによる逆説的増加に関する研究 (瀬野裕美 広島大学大学院理学研究科数理分子生命理学専攻)
- P6-06 雪だまりゲームでの空間による協調戦略の促進効果はあるか? (倉 知宏 憲静岡大学工学部システム工学科)
- P6-07 月による生物現象のピークの差のブートストラップ検定 (岡村寛 (独)水産総合研究センター遠洋水産研究所)

大会アンケート

初めての年次大会なので、参加者による大会アンケートを実施した。その結果、合宿形式から通い形式に変えたことはそれなりに好意的に受け入れられたようだ。また、いくつもの会場で並行してさまざまな企画シンポを走らせたのは、充実していたと評価されたようだが、その反面、慌しさを感じる人も少なくなかったと言える。同様に、秋の学校で基調シンポの平易な解説を行ったのは高く評価されていたものの、一般講演 (ポスター発表) の裏番組で開催されたために、時間が合わずに聴けなかった不満を述べた意見が多かった。確かに、週末の2日間にこれだけの企画・イベントをぎっしり詰め込み過ぎた感があるようで、これは次回の京都大会への申し送り事項にした

- (1) あなたは会員ですか、非会員ですか?

会員=33 非会員=10

- (2) あなたの年齢は?

20代=16 30代=11 40代=10 50代=5 60代以上=1

(3) あなたの身分は？

学部学生=1 院生=9 研究生=2 ポスドク=16 有給教員・研究員=13 その他=2

(4) 大会を合宿形式から通い形式に変えた第1回の大会でしたが、印象はどうでしょうか？

通いで良かった=20 合宿の方が良かった=5 どちらとも言えない=18

[意見]

- ・ 初参加なので比較できない(3件)
- ・ 通いだっただけで参加を決めた。小さな子供がいる場合、合宿形式では参加できない。

(5) 合宿形式のときは、1つの会場ですべて基調シンポ形式にしていました。今回の大会は平行して複数のシンポを開き、2日目午後だけを基調シンポにしました。このやり方は？

充実して良かった=28 以前の基調シンポ1つだけが良かった=2 どちらとも言えない=12

[意見]

- ・ 2日間の日程としては詰め込みすぎだと思う。
- ・ 初めてなので、前回は知らない(同様の回答が3件)

(6) 外国人研究者を招聘しましたが、1日目には英語セッションはありませんでした。英語セッション(ポスター発表も含めて)をもっと設けた方がよいでしょうか？

もっと設けるべき=6 今回のでちょうど良い=28 英語セッションはなくても可=5 その他=3

[意見]

- ・ せっかく招聘した研究者にもっと研究をアピールしてコメントをもらう為にも、英語発表を奨励すると良いかも。ポスター賞の専攻を英語ポスターに限る等。
- ・ 複数シンポを設けるなら、うちひとつを英語にしても良いと思う。
- ・ 国内に滞在する外国人研究者(例えばJSPS特別研究員など)が聞くものが無い。
- ・ 参加者の大多数が日本人なので、無理に英語セッションを増やす必要は無い。
- ・ 内容が詳細になるほどやはり日本語のほうが良い場合があるので、機会は分ける方が良いと思い、今回はちょうど良かったと思う。
- ・ せっかく来た外国人が聞ける話が少なくとぼやいていた。並列セッションを増やして、英語だけでずっと聞けるセッションを一例維持するのが良いと思う。
- ・ 本学会の意欲水準からすればもっと英語(国際)セッションを増やせばそれに見合う長期的なベネフィットがおおいに見込まれる。でも、常態を目指すにはまだ無理が大きいかもしれない。可能な年にはぜひ、というところか。
- ・ 必要に応じてやればよいと思う。

(7) 「秋の学校」では基調シンポの趣旨・内容を講義で解説しましたが、いかがでしたか？

大変良かった=8 よかった=5 普通=3 あまりよくなかった=1 ダメだった=2

[意見]

- ・ 分かりやすかった。
- ・ ポスター発表の時間と重なったので、参加できなかった。行きたかった。(同様の回答が7件)
- ・ とても参加したかったが、ポスターもずっと楽しみにしていたので、秋の学校に参加できなかった。個人的好みで大変申し訳ないが、“学校系”は非常に出席したいものなので、分けていただければありがたかった。(同様の回答が2件)
- ・ ポスターが忙しくて聞きに行けませんでした。(同様の回答が5件)

(8) 今回、ポスター発表は一挙に件数が増えました。コアタイムの設定、ポスター賞などを設けたのはよかったですでしょうか？

大変良かった=15 よかった=15 普通=6 あまりよくなかった=3 ダメだった=0

[意見]

- ・ コアタイムの設定は良い。ポスター賞は不必要。賞など無くても十分に盛り上っているのでは？ポスターのコアタイムを1日目にして懇親会をすべきだと思う。
- ・ ポスター賞は良いと思う。もう少しじっくり時間がほしかった。
- ・ コアタイムを設定してもしなくてもポスター発表の時間中は発表で動けない。発表の時間を分けてほしいか

- った。他の発表を見に行きたいので。
- ・ 秋の学校で聞きにいけないポスターが多かった。(同様の回答が2件)
 - ・ 夜間、貼りっぱなしにできたら良かったと思う。
 - ・ 他の学会でも思うだが、奇数・偶数にくわえ、フリーという3部があるとなお良いと思う。あと、個人的にはポスター時間は長い方がうれしい。
 - ・ 部屋が狭かったせいかな? 2日目はポスター会場がお酒臭かったように思う。
 - ・ どのポスターが受賞したのかが、(表彰式後に見に行けないので)分かりにくかった。
 - ・ コアタイムが秋の学校に被ってしまったのは、残念だった。これでは発表者が秋の学校に参加できなくなってしまう。また僕の場合、ポスターに集中するあまり、秋の学校を逃してしまった。ポスター賞をもうけたのは良かったと思う。
 - ・ 自己申告の若手に対象をしばることは、賞の価値・意味を相互に共有する上で大切だと思う。今回は、熟練のメンバーも多くが比較対象にふくまれていたので審査の難しさがひとしおだった。
 - ・ 生態学会と同じことをやらなくてもよいのではという気もした。生態学会等での賞の審査によって全体の質が向上したことは認めるが、短時間で分かりやすさを求められるあまり、キャッチーなだけの研究発表も増えたような気もしている。ポスター発表について、じっくりと意見交換のできることをメリットと考えている人達も少なからずいると思う。発表件数の増加は開催地と開催方法の影響の方が大きい気もする。
 - ・ ポスター賞は発表の励みになって良かった。
 - ・ コアタイムの分割はもう少し細かいと良いと思う。
- (9) 大会全般について、裏面に自由にご意見をお書き下さい。
- ・ 楽しかった。
 - ・ 自分の専門は個体群生態学そのものではないが、勉強したいと思い参加した。「通い」の方が自分としては敷居が低く参加しやすかった。
 - ・ ポスター賞については、賞を取ったものの展示がほしい。どのようなポスターが良いポスターか」という指針・勉強にさせてもらいたい。(同様の回答が2件)
 - ・ 見たい講演が同じ時間に重複するケースが多く、惜しかった。
 - ・ 会場案内について: 構内に入ってから受付に辿り着くまでの経路が不案内だと感じた。四つ角などに紙を貼ってあったが、遠くから辛うじて矢印が見える程度で字が小さすぎて見えず、役立っているとは思えなかった。1号館前のベンチに座っていると「受付はどこか?」と複数の人に聞かれた。運営者にとっては慣れた場所で地図が無くとも大丈夫だろうが、初めて訪れる側のことを考慮してもらいたい。この大会だけに限らずだが。
 - ・ 懇親会はポスターの後、もしくは、ポスター会場でお酒を片手に、というのが好き。理由は、自分などのように、まだどの方がどの研究をされたかがわからない者にとっては、研究内容もおりませた上で楽しく懇親できると思うから。会場は大変になってしまうが、非常に楽しかった。ありがとうございます。
 - ・ 今回は今まで私が参加した大会のなかで一番充実していたように感じた。ポスター賞は励みにはなるが、本来は発表を聴いた研究者と議論をすることのほうが重要なはず。しかし経験豊かな研究者に審査員を任せると、一つの発表を詳しく見られなくなってしまうので、結果として発表者がそのような研究者と有意義な議論をする機会を減じているということはないかと危惧する。
 - ・ ワークショップなどを特に大学院生やポスドクの人たちが企画するというのはとても良いと思う。進化のセッションはどれも優れたものだった。並列セッションを増やして、進化学会みみたいな雰囲気にするのもっとたくさんの人が個体群生態学会に入ってくると思う。
 - ・ 学会の成長に見合った運営でよかったと思う
 - ・ 招聘研究者はお二人ともすばらしい研究者であり、内容もエキサイティングだった。他には、進化生態学のシンポが充実していてよかった。不満だったのは会場の広さ。いずれのシンポでも、立ち見が目立ち、ゆったりと講演を聞く状態ではなかった。
 - ・ 全体的に興味のあるシンポジウムが満載で、とても充実していたと思う。しかし、シンポジウムが3つ重なり、聞きたくても聞けないものが増えてしまうので、せめて2つまでにしてほしいかなと思った。
 - ・ ポスター賞をもう少し増やしてほしい。英語のシンポが2日目午後で疲れが出たのか寝ている聴衆が目立っていたのは残念だった。
 - ・ 今回は初めて参加のため、また、初日の社会性昆虫のシンポのみの参加なので、上記質問には答えられないものが多く申し訳ございません。ただ、大きな学会とは異なり、熱気あふれる議論をすることができ、大変楽しませてもらった。機会があれば今後も参加したいと思う。
 - ・ 今回はシンポが専門に分かれ、生態学会に似た印象を受けた。以前のシンポ形式の方が専門以外の発表を

受動的に聞け、刺激的だった。

- ・ 初めて参加したが、生態学の中でもコアな領域でつまんだ話がたくさん聞けたのでとても面白かった。また機会があれば、参加したいと思う。
- ・ 初参加だったのですが、非常に有意義な時間を過ごさせてもらった、ありがとうございます。これまで口コミで個体群生態学会は面白そうだという話は聞いてはいたが、大会に毎回サブタイトルがついていることが、それ以外の発表を受け付けないという意味に誤解していたことと、合宿形式のため費用が高額なことが障壁となり、これらがこれまで参加せずにいたことの大きな原因だった。しかしいざ参加してみると、この雰囲気ならば合宿形式の方がたしかに面白いとも感じ、合宿形式の是非については何とも判断できないものがある。
- ・ 初めて参加したが、中規模の人数ながら充実した議論ができていた学会でとても楽しかった。運営委員の方々はお疲れ様でした。
- ・ 面白いシンポが多くて大変勉強になった。
- ・ 多様な内容の発表があり、たいへん勉強になった。
- ・ ポスターの会場がシンポ会場と少し離れていたため、空き時間ではなかなか回りきれなかった。ポスター会場も狭かったため、コアタイムにはかなり混雑していたように感じる。

大会収支決算

第24回 個体群生態学会年次大会(東京) 決算

収入	単価	数量	金額
大会参加費			¥854,000
懇親会費			¥456,000
書籍展示			¥40,000
収入総計			¥1,350,000
支出	単価	数量	金額
講演要旨集		200部	¥158,050
大会案内ポスター		100部	¥37,100
会場借用料			¥169,500
ポスターボード運送費			¥28,733
アルバイト		4人	¥49,500
受付など事務関連			¥30,464
懇親会開催費			¥387,000
実行委員会運営費			¥89,153
支出総計			¥949,500
残高			¥400,500

研究室紹介

九州大学理学部数理生物学研究室

舞木昭彦 (九州大学大学院理学研究院 JSPS 特別研究員(PD))

九大数理生物研究室に来て一年が経ちます。去年の今頃、ポスドクの受け入れ研究先であるこの研究室の門を叩きました。教授室に挨拶に伺うと、厳しさと寛大さを持ち合わせていらっしゃる方だとすぐに分かりました。研究の話をもっと簡単にした後、研究室の案内をしてくださいました。祝日ということもあり研究室には人がいなかったのですが、教授がとても親切に対応してくださいました。

私は、数理生物学というものを大学の四年生のときに初めて知り興味を持ちました。北海道大学水産学部の西村欣也准教授の研究室に入ったのがきっかけです。ある日「数理生物学入門」という本を知り、当時理解できない数学がちりばめられていたものの読んでみました。しかし十分にその研究対象の幅の広さと、クリアな問題設定、シンプルな研究アプローチ、非自明な結論を感じとることができました。その本で初めて巖佐庸教授の名前を知りました。それから九大数理生物には、佐々木顕准教授（現総合研究大学院大学・葉山高等研究センター教授（(独)科学技術振興機構さきがけ研究者））、たくさんの優秀なOB、学生がいるということも知りました。

研究室には現在、巖佐庸教授、森下善弘助教（科学技術振興機構さきがけ研究者）をはじめ、3名のポスドク、11名の大学院生（3名は総合研究大学院大学・葉山高等研究センターで佐々木顕教授の指導を受けている）、4名の学部生が所属しています。数名は海外留学に行っていることもあり、実際研究室にいる人数は多くはありません。研究対象は幅広く、生態学だけでなく、発生、免疫などもあります。研究室は幾つかの部屋に分かれており、各部屋には分野が異なる人たちが数名ごと配置されています。おかげで、分野外の研究についても知ることができます。私自身昨年はほとんど他分野の人と議論し、とても勉強になりました。

巖佐教授はとても気さくな方で、おお

げさでなく毎日のように学生に声をかけ指導されています。あるときは、サプライズでご自宅に夕食に招待してくださることもありました。奥様の料理の質の高さに驚きつつ、教授の細かい心配りにも感動しました。ときには厳しくもあります。例えば、不定期で行われているセミナー(MEセミナー)の一幕。いつもであれば的確な質問やアドバイスを超高速CPUでなされた後、にこやかに「すばらしい研究」と締めくくられるのですが、ご機嫌が思わしくないときは全く様子が違います。あるポスドクの発表のときでした。数理モデルの説明のある場面で、瞬時にして表情が一変し、モデルの欠陥について徹底的にやっつけにかかりました。それは彼の数年にわたる仕事すべてを否定するものだったのです。その場は異様な空気に包まれました。しかし、普段は「褒めて伸ばす」という印象が強く、めったにこのような場面を眼にすることはないので、私としては幸運でした。出身大学の教官もそうでしたが、このように学生と密に接してくださる教官にめぐり会えることはとても幸運なことだと思います。森下助教もまた熱心に学生の面倒を見てらっしゃいます。また教授との関係はとてもすばらしく、暇さえあれば議論しています。議論は場所を選びませんが、たいてい私の部屋の隣のお茶部屋で行われているため、長いときは「もうそろそろ...」と思うほどです。これに比して学生同士の議論はまだまだ少ないようですが、分野を超えて議論しているのでさまざまな意見を得ることができているようです。

研究室に来た当初、「論文は読むな、勉強するなと学生に教えている」と教授はおっしゃっていました。「論文を読め、勉強しろ、たわけ」と言われてきた私からするとよく理解できませんでしたが、これは深いことをおっしゃっているに違いないと思い、なるほど「論文を読むのは当たり前で、それ以上のことを求めてら

っしゃるのですね」と返すと、「いやいや、論文読んだりしても意味ないやん。そんなの時間もったいないから、研究してから論文書くときに読めばいいってこと」と笑いながらおっしゃいました。そのためなのか、ここでは学生たちは常に研究をしているという印象です。

研究室は主に発生グループと生態グループに分かれています。発生グループは巖佐教授と森下助教のお二人が指導されています。生態グループは巖佐教授が主に指導されています。生態グループでは現在、発癌プロセス(巖佐庸教授、波江野洋(D3))、協力の進化(巖佐庸教授)、人間の行動と環境変化の関係(巖佐庸教授)、一斉開花現象の進化(立木佑弥(M2))、海草の生活史にみられる異型世代交代型と同型世代交代型の進化(別所和博(M2))、捕食者と被食者の間にみられる対抗的な表現型可塑性(誘導防御、誘導攻撃)の共進化(舞木昭彦(PD))などについて研究しています。発生グループでは、多細胞生物に見られる形態形成のダイナミクスについて、脊椎動物の肢芽の伸長過程(森下善弘助教)、腎臓や肺に見られる細胞分岐過程(平島剛志(D2))などを例に研究しています。その他に、獲得免疫に見られる制御性T細胞の役割を適応的観点から理解する研究も行われています(佐伯晃一(D1))。

幾つか簡単に紹介しましょう。

発癌プロセス

過剰な細胞分裂は通常は制御されていますが、その制御が打ち破られ分裂が果てしなく繰り返されることがあり、その現象が癌と呼ばれているものです。癌抑制遺伝子などに生じる突然変異をきっかけに突然変異が蓄積し癌化が生じるため、発癌プロセスは突然変異と置換の繰り返しが引き起こす生物進化過程と似たものと解釈できます。この観点から進化を理解する上で便利な集団遺伝学の数理モデルを応用し、発癌抑制システムやそれを掻い潜り発癌を引き起こすプロセスなどの本質に迫っています。発癌に関する研究は、Martin Nowak (Harvard University)、Franziska Michor (Sloan-Kettering Cancer Institute)らとの共同研究によって行われています。

協力の進化

協力行動は多くの生物の行動に見られる現象です。これまでに血縁淘汰や互恵的利他主義などの説明がありますが、最近では間接互恵性というものについて興味が集まってきています。それは、あの人は「良い人」、「悪い人」というように評判を通じて協力行動が維持されると理解するものです。ここで問題になるのは、何を持ってして善悪とするかですが、その規範がどのようなものであると協力行動が引き出されやすいのかという問題や、「悪い人」を罰する懲罰の役割についてなど研究しています。協力に関する研究は、OBの大槻久(東京工業大学大学院社会理工学研究科、日本学術振興会特別研究員 PD、科学技術振興機構さきがけ研究者)、Martin Nowak らとの共同研究です。

一斉開花の進化

森林樹木の中には、例えばブナのように繁殖が広域にわたって同調し行われ、数年後にまた同調して繁殖するというような一斉開花と呼ばれる興味深い現象が知られています。巖佐教授とOBの佐竹暁子特任助教(北海道大学創成科学共同研究機構、科学技術振興機構さきがけ研究者)は、どのように同調現象が起こるのかについて一連の研究で理論的な説明を与えてきましたが、最近では、同調現象が進化する条件はどのようなものかに注目し、立木佑弥(M2)が中心となって研究しています。

表現型可塑性の共進化

生物はたいてい表現型可塑性と呼ばれる能力を持っています。それは環境変化に対し同一遺伝子型にも関わらず形質を可塑的に変化させるもので、行動だけでなく形態にも見られる一般的な現象です。たとえば、突如として現れる捕食者に対し、食われる側は逃げたり隠れたりとげを生やすなどして危険回避したりします(誘導防御)。一方で、その形質の変化に対し捕食者も形を変えたりすることで飢餓リスクを回避することもあります(誘導攻撃)。このように捕食者-被食者のあいだでは互いの表現型可塑性によって短時間のうちに共進化的な形質変化が見ら

れる場合があります。こうした現象は対抗的表現型可塑性と呼ばれ、その進化・維持条件について舞木昭彦(PD)が研究しています。これは岸田治特任助教(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)との共同研究です。

発生グループの研究についても触れましょう。

形態形成メカニズム

多細胞生物の発生過程では細胞分裂、細胞分化などさまざまなイベントがあり、自発的に形態が形成されていきます。形態形成において重要な役目を果たすのが、モルフォゲンと呼ばれる細胞に位置情報を与える拡散性化学物質の濃度勾配です。しかし、濃度勾配にはノイズが付きまとい正確に位置情報を得るのは難しく思われます。それにもかかわらず、多細胞生物の発生はきわめてロバストなのはなぜなのでしょう。森下喜弘助教がこの問題に最近取り組んでいます。

生物パターン形成

腎臓や肺といった生体内で分岐形態を持つ器官の初期発生過程では、一層の細胞シートで構成される管が、先端分岐・側枝分岐・伸長といった分岐モードを繰

り返しながら全体のパターンを作る事が知られています。また、それらのモードを誘導する遺伝子制御関係も明らかにされています。実験観察を基に得られた知見を取り込んで、管分岐の形態変化や分岐モードが誘導される条件などを平島剛志(D2)が調べています。

このように、九大数理生物では生態学だけでなく、発生、免疫など幅広く研究しています。私自自身の大学院時代は、私以外の学生はすべて実験をしているという環境で、かつテーマも偏っていました。しかし、この研究室では全員が理論研究を行い、テーマも多岐にわたるという環境です。このように両極端の研究室で過ごせたのはとても幸運なことと思います。わざわざ数理モデルを用いて研究せずとも、実験的研究で十分理解できる研究対象もあるでしょう。実験でなくては理解できないこともあるでしょう。しかし、数理モデルを用いた分析でしか発見できなかったこともあります。そういったものに出会えたとき、数理生物学をやっている良かったと私は思います。今日もまた九大数理生物学研究室では、そんな幸福な瞬間を求めてそれぞれが机に向かっていきます。



研究機関における個体群生態学分野の研究紹介
国立環境研究所 環境リスク研究センター 五箇研究室
井上真紀

五箇研究室、というとみなさんはどんなイメージを持っていますか？黒い服とサングラス？油断ならない守銭奴？派手なパフォーマンス？過激さゆえに敵も多く味方も多いタカ派？

研究室のイメージというよりは、我々がリーダーのイメージですね。確かに、常に黒い服、研究室から一步でも外に出るときですらサングラスをかける。さらにしゃべらせたら、一般市民だけでなく専門家すら感動させ、時に煽動させてしまうほどの話術の持ち主。そんな才能をフルに活かして、次々と外部資金を獲得、幅広い人脈を活かして面白そうな研究ネタを集め、競合者を打ち負かしてきたと思われるような数々の逸話。

確かに、これらはリーダーを現す特徴の一部であります。でも、私たちは生物学の専門家とその卵のはず。五箇研究室って、五箇リーダーって、実のところどんな生態特性をもっているのか、本当に巷で囁かれているような恐ろしい研究室なのか、これから科学的に(?)検証したいと思います。

2009年5月現在、五箇公一主席研究員を筆頭として部屋のスタッフは、ポスドク3名、学生は修士課程2名(茨城大・日大)、4年生(茨城大)、さらに事務・会計・実験をサポートしてくれているアシスタントスタッフ4名の計11名になります。男女比は、6対5で、若干男性優位。これまで本研究室は、圧倒的な女性優位の性比であったわけですが、リーダーの嗜好性の変化か、あるいは何らかの心境の変化か、なぜか最近では男性の割合が増加しつつあります。ちなみに、研究スタッフの研究室における生態系機能で分類すると、タカ派4名、ハト派1名、ハゲタカ派1名、現時点で未判定種1名となり、生態系ピラミッドは見事に逆転しています。

研究テーマは、おもに野外調査や操作実験による外来生物の生態リスク評価を行っています。材料は、授粉昆虫マルハ

ナバチ、ペット昆虫クワガタムシ、寄生性ダニ、両生類感染症カエルツボカビ、外来アリ、外来貝類カワヒバリガイなどさまざまな分類群に及びます。分子遺伝学的手法を用いて生物の進化や多様性の形成過程を明らかにするとともに、外来生物の侵入経路や分布拡大プロセスの解明や分布拡大予測を目指しています。加えて行政対応も重要な業務で、環境省の外来生物法における外来生物管理に対して科学的根拠の提供も行っています。例えば、セイヨウオオマルハナバチの特定外来生物指定や外国産クワガタムシの逃亡防止キャンペーンに貢献し、最近では、カエルツボカビの全国調査やリスク評価も進めています。また、本研究室では侵略的外来生物に関する情報発信や普及啓発を目的として、「侵入生物データベース」および研究室の研究成果をweb上で公開しています。さらに、リーダーの農薬や化学物質に関する知識を活かして、化学物質の生物多様性に対する影響評価研究も行っています。

小さな研究室ですのでデスクワークも実験も皆、同じ部屋で行っており、日常的に学問、研究に関するさまざまな議論が(時にはトンデモ論も)飛び交うのですが、週に1回、研究室内でセミナーも行い、研究の進捗状況や論文を紹介し、互いの研究に対する理解を深め、研究向上を目指しています。

大学とは大きく異なり、本研究所に求められていることは、いかに社会ニーズに応え、科学的知見に基づいた情報発信を行えるか、という点にあると私たちは考えます。このため、リーダー含めて私たち研究スタッフは、大学時代とは大きくテーマを変えることもしばしばです。例えば、ダニからクワガタムシやカエルツボカビへ、マルハナバチから外来アリへ、サンショウウオからカワヒバリガイへ、トカゲからデータベース開発管理へと、新たな研究材料だけでなく、新たな研究手法にまで挑戦しています。また、

特に外来生物問題は、人間社会と密接に結びついており、生態学的視点のみで解決を図ることが難しい場合が多く、社会経済学的アプローチも学ぶ必要があります。

このように書くと「なんだかとても厳しい研究室なのでは?」と思われるかもしれませんが、ですが、考えようによっては、とても自由度は高いのです。研究室のテーマ、つまり環境科学に関連があり、重要な課題を提案できれば、自由に研究を進めることができます。また、自分で研究資金を獲得すれば、萌芽的研究テーマであっても好きに研究を行うこともできます。さらに、国内外問わず、学会参加や研究者との交流や現地調査・視察も積極的に行うことを奨励されています。本研究室で新しい研究材料や研究手法に取り組むことは、たとえ業務であったとしても、確実に私たち自身の技術や知識

の向上、そして各自の研究業績になります。さらに社会との接点を直に持つことで、研究のやりがいにもつながります。そう考えれば、ここで取り組む研究は大きなチャンスであり、次へとつながる重要なステップになるのではないのでしょうか。

最後に、好き嫌いがはっきり分かれ、他人に厳しく自分にも厳しい、我らがリーダー。外見の派手さはともかく、実際はとても堅実に、そして地道に仕事をこなす(つまりは意外にも地味!?)、さまざまな普及啓発活動を通じ社会貢献を願う熱意あふれる研究者です(熱が入りすぎるのが玉に瑕!?)。また、研究室メンバーからは尊敬され、非常に頼りにされている、はず・・・です(おそらく)。

国立環境研究所への pathway

国立環境研究所侵入生物研究チーム 五箇公一

独立行政法人国立環境研究所は、地球温暖化、廃棄物対策、環境リスク、アジア自然共生をプロジェクトの主軸テーマとして、研究を進めています(第二期中期計画、2009年6月現在)。これらプロジェクトの中に生態影響評価、あるいは生物多様性モニタリングを業務とした、生物系研究室がいくつか組込まれています。我々、侵入生物研究チームもそのひとつです。またプロジェクト研究以外に、基盤研究部門が設置されており、ここには生物圏環境研究領域が存在します。研究職員は、パーマネント研究員の他、任期付研究員、特別研究員などのテニュアトラック・ポジション、ポスドクフェロー、アシスタントフェロー、およびパー

トタイマーなどの契約職員で構成されています。いずれも、随時、公募によって募集され、所内の審査によって、採用が決定されます。フェローは原則最長任期5年間ですが(予算の都合次第ではそれ以下)、テニュアトラック・ポジションに応募する資格があります。テニュアトラック・ポジションにつけば、5年間の任期中に中間評価を受けて、任期解除が受理されれば、晴れてパーマネント職員となります。公募情報は、研究所のホームページ上で不定期に更新されますので、就職希望の方はこまめにチェックされることをお薦め致します。高い志をもった研究者が参集されますことを切に願っております。



クロタカー派ー2009年5月22日国際生物多様性の日の展示会場にて五箇CGとともにー

研究機関における個体群生態学分野の研究紹介

産業技術総合研究所 生物機能工学研究部門 生物共生相互作用研究グループ

東樹宏和

独立行政法人産業技術総合研究所（以下、産総研）の生物共生相互作用研究グループについて、日本学術振興会（以下、学振）特別研究員の立場から紹介させていただきますと思います。

研究グループのポリシー

本研究グループの研究に関する戦略は、深津武馬グループ長より明確に定義され、ウェブページ（<http://staff.aist.go.jp/t-fukatsu/>）にも掲載されています。要点を3つに絞ると以下のようになります。

- ・生物現象として極めて興味深いものを扱う

- ・共生、寄生、社会性、さらに、寄生者による生殖操作や形態操作といった、高度な生物間相互作用を伴う現象に着目する

- ・最先端の手法を用いて、分子から生態までの幅広いレベルで現象を理解する

グループ長の言葉を借りれば、博物学を現代的な手法で展開する「温故知新」が本研究グループの持ち味であり、独自性の高い研究を生み出す源になっているのではないかと思います。

研究グループ長について

深津武馬グループ長の特色は、生物とそのナチュラルヒストリーに関する広範な知識と、それを現代生物学の枠組みで的確に理解する研究手法にあるかと思えます。グループ長自身が、昆虫をはじめとする様々な生物に深い造詣と愛情をもっており、多様な人材が集まり、研究グループの研究課題が広く展開される一因となっているようです。

強力に基礎研究を推進し、新しい知識や技術の芽生えを社会に還元するという一貫した姿勢も、グループ長の「熱さ」を物語っています。基礎研究としての新規性と応用面での重要性を兼ね備えた研究成果が、学術論文としてのみならず、これまでに数多くプレス・リリース等を

通じて社会に発信されてきました。こうした業績が認められ、2007年、日本学術振興会賞が授与されるに至っています（http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/ichiran_4rd/21_fukatsu.html）。

研究室の構成メンバー

本研究室の構成員は、2009年5月現在、常勤研究員5名、ポスドク4名、大学院生3名、技術補助員3名、外来研究員等5名となっています。他の独立行政法人の研究機関と同様に、大学に比べて博士号取得者の割合が高い構成であると言えます。

3名の大学院生は、グループ長が教授および助教授を兼任する東京大学および筑波大学の学生として在籍し、大学院の授業を受講しつつ、主に本研究室で研究活動を行っています。

ポスドクは主に、グループの予算により産総研に雇用される博士研究員（産総研特別研究員とよばれます）、そして学振特別研究員として在籍するという2つのパターンがあります。ポスドクそれぞれのバックグラウンドは多様で、分子生物学から進化生態学まで、広い範囲に及びます。

さらに、短期もしくは定期的に外部の人を産総研の研究グループに受け入れ、研究をおこなうことのできる「客員研究員」「外来研究員」「技術研修」といった制度が整備されており、放送大学の教官、理化学研究所の博士研究員、東京大学の大学院生、沖縄県農業研究センターの研究員といった方々が時々やってきては実験や議論をしています。

研究課題のひろがり

本グループが扱う研究課題は、共生をキーワードとして多岐にわたっています。その中で、昆虫とその体内細菌との共生に関わる研究は、世界的にみても本研究グループの独自性が高い課題であると言えるでしょう。たとえば、共生細菌によ

る感染を、巧妙な実験操作で制御し、昆虫自身の適応度に与える影響を評価する手法によって、これまでに数多くの発見がなされてきました。たとえば、マルカメムシ類を対象とした研究では、近縁なマルカメムシの種間で共生細菌を入れ替えることに成功しています。この実験から、特定の細菌に感染することで、マルカメムシが豆類を食物として効率よく利用できるようになり、「害虫化」することが明らかになりました (Hosokawa et al. 2007)。

また、昆虫と微生物の共生以外にも、寄生や社会性を対象にした様々な研究が展開されています。たとえば、虫えい形成アブラムシのワーカーが、傷ついた虫えいを自身の体液で修復するという意外な自己犠牲行動に関する研究 (Kutsukake et al. 2009) は、最近、各種メディアを通じて報道されたので、記憶に新しい方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

学生およびポストドクの研究課題

本グループに所属して研究を始める学生やポストドクは、自身の視点と興味を土台として、高度な生物間相互作用を対象に研究課題を立ち上げます。研究を進めるにしたがい、自身の研究履歴を背景にして各自が研究対象や研究手法に通じるようになります。そのため、研究グループ全体が、専門家の集団として機能し、互いが刺激を与え合いながら研究が深化していくしくみになっています。大学に比べて博士号取得者の割合が高いこともあり、学生は的確なアドバイスを受けながら自身の研究を着々と進めていくことができます。その効果は、本研究グループで学振特別研究員DC1を取得する学生の多さに表れているようです。

研究環境

本グループに在籍する者には、大変に恵まれた研究環境が提供されます。各人には、デスクワークを行う机の他に、分子実験を行うための机が用意され、また、昆虫の飼育を行う者には、さらにもう一つ、作業部屋の机が割り当てられます。基本的な分子実験を行う環境は完備されており、生物機能工学研究部門で購入された DNA シーケンサー (ABI 3130) も、

本グループの実験室に設置されています。

その他に、昆虫を飼育する際の作業を行う部屋、20℃と 4℃にそれぞれ設定された恒温室、10 台以上のインキュベーターが置かれた部屋、そして、アブラムシやショウジョウバエを飼育する専門の部屋が 3 つ存在します。こうした充実した設備を用いて、昆虫系統の維持やバイオアッセイが行われるわけですが、各人が複数の研究テーマを抱えて昆虫の飼育を行っているため、インキュベーターは常にフル稼働の状態にあります。

産総研構内の環境と設備も、研究活動を円滑に進めるのに貢献しています。地図をご覧くださいになるとわかりますが※、産総研はつくばの中心部に近い場所で、広大な面積を占めています。構内の中心部に研究施設が散在し、そのまわりをコナラなどの広葉樹で構成される二次林が取り囲んでいます。この林には、ノウサギ、タヌキ、ハクビシン、キジなどのさまざまな野生動物のほか、多くの昆虫類が生息しており、研究材料となる昆虫を構内で調達することもあります。構内の各所にある立派な桜の並木では、桜吹雪の中を通勤する贅沢を味わうことができます。

構内には生協の売店、複数の食堂 (カフェを含む)、診療所、体育館、また、地質標本館やサイエンススクウェア (産総研が誇るロボットの展示があるらしい) もあり、生活面でも大学と変わらない環境が提供されています。

※産総研の所在地および構内マップは以下をご覧ください：

http://www.aist.go.jp/aist_j/guidemap/tsukuba/tsukuba_map_main.html

最近の学生受け入れの動向

現在 3 名在籍の大学院生はすべて、生物における共生現象や進化に関心を持ち、著書やウェブサイトやロコミを通じて研究内容を知り、E メールで面会のアポをとってグループの門を叩き、受け入れられたという経緯です。生物に対する興味や研究に対する意欲のある方は歓迎されると思いますので、グループ長 (t-fukatsu@aist.go.jp) に直接コンタクトをとって相談するとよいでしょう。

当グループに所属する大学院生のメリットとしては、研究環境や設備がよく、

多くの常勤職員やポスドクによる行き届いた技術指導や教育を受けられ、高いレベルの研究を体感して身につけることができます。卒業研究生や修士学生については、修士1年次のうちに原著論文を發表させ、学振特別研究員 DC1 を取得させることにより、博士課程で研究に専念できる環境をととのえるのが基本的な指導方針となっているようです。

一方、デメリットといえる面としては、同じ立場の大学院生が少ない環境なので、寂しがりやの人には孤独感があつたり、だべったり愚痴を言い合ったりする仲間が少なかつたり、学内情報に疎くなつたりすることがあります。こういった雰囲気のため、修士課程を出て就職を希望するような人にはあまり向いていないかもしれません。

最近のポスドク採用の動向

ポスドクの採用については、(1) プロジェクトの採択等で予算がとれたときに産総研ウェブサイトや EVOLVE, Jeconet 等に公募を出し、応募者の中から選考して採用；(2) 博士課程の大学院生がポスドク先として希望し、学振特別研究員 PD の申請を出して採択；(3) 学会等の機会にグループ長が博士課程の大学院生に目を付け、勧誘して学振特別研究員 PD の申請を出させて採択；という3パターンが主です。ちなみに私の場合は博士課程2年の時に、九州大学に集中講義で来た深津グループ長に飲み会の席で「よかつたらうちに来てポスドクをしないか」というお言葉をいただき、産総研に移る機会を得た(3)のパターンでした。過去に同様のパターンで産総研で学振特別研究員 PD を経験された先輩方として、柴尾晴信さん(現 東京大学教養学部 助教)、徳田誠さん(現 理化学研究所 基礎科学特別研究員)、細川貴弘さん(現 産総研 博士研究員)といった錚々たるメンバーがいらっしゃいます。

したがって、当グループにポスドクとして参加することを希望する場合は、(1) 公募が出たら応募する；(2) グループ長にコンタクトをとって学振 PD の申請を出す；(3) グループ長に勧められるままに学振 PD の申請を出す；というやり方が可能です。当グループではポスドクは

常勤職員と同等の独立した研究者として扱われ、研究テーマは学振特別研究員であれば、基本的にまったく本人の自由です。ある程度の論文文化された業績と、研究への強い意欲と、そして独立した研究者としての気構えがある方には、最適な環境であろうかと思えます。

最近の常勤職員採用の動向

以下は常勤職員採用プロセスに関する深津グループ長からの説明です。

「最近の産総研では、新規採用職員は基本的に5年間の任期付です。ただし任用の4年目にパーマネント審査があり、これをクリアすれば任期なしの職員になりますので、すべてテニュアトラック採用です。パーマネント審査の通過率は現状で8~9割程度で、毎年論文1報を着実に出すくらいの実績があればクリアできています。」

「採用システムは絶えずかなりダイナミックに改訂されていくのですが、現状では、採用枠が産総研上層部から分野別(ex. バイオサイエンス、環境、ナノテク etc.) に割り振られ、それらを研究部門や研究センター間で戦略的研究領域を提案しながら競い合つてとりあうというシステムになっています。実際には、産総研上層部は実際の採用可能数よりも多めに採用枠を割り振り、研究部門等ではその採用枠を競争的に獲得したうえで産総研ウェブサイトや JREC-IN 等に公募を出します。その応募者の中から、まず研究部門等のレベルで書類選考および一次面接をおこない、候補者を1名に絞りこみます。この候補者について、当該分野における二次面接をおこない、承認が得られれば理事面接に上げられます。」

「理事面接では研究業績はもちろんのこと、受け答えやものの考え方などについても厳しい評価がなされるようです。研究の重要性や面白さを打てば響くようにアピールできるプレゼン能力が必要です。形式的な理事面接では決してなく、ここで落とされることもよくあるそうです。その場合、当該研究部門等ではせっかく獲得した採用枠をみすみす失うことになります。したがって研究部門長等にとっては、いかに強力な実績を持つ候補者を用意できるかが、この内部採用競争

を勝ち抜くポイントとなります。」

「そのため、候補者には相当に高いレベルの実績が要求されます。研究分野および候補者の年齢にもよりますが、(1) Nature, Science, Cell レベルの筆頭著者論文があること；(2) 原著論文がそれなりのレベルの雑誌にできれば 20 報以上あること；(3) さきがけ研究者である、大学の准教授ポジションにあるなど、顕著かつ具体的な実績を有すること；のうちの少なくとも 1 つにあてはまることが望ましいと一般にいられています。」

「この数年は特に定員数削減のあおり等で、新規採用の絶対数がきわめて少なくなっています。ですから常勤職員採用は厳しく狭き門ではありますが、不可能ではありません。当グループでこの 2009 年 4 月から、二橋亮さんが上述のプロセスをすべてクリアして新規採用となりました。彼の場合には、選考時 30 才で筆頭論文は Science 誌 (Futahashi and Fujiwara 2008) を含む 8 報、非筆頭論文 6 報、和文報文等 66 報で、戦略的研究領域の設定は『高度な生物間相互作用の基盤となる分子機構の解明』でした。」

なぜ産総研で好きな昆虫の研究ができるのか？

これはよくきかれる質問です。産総研のウェブサイトやパンフレットをみると、キャッチコピーは“技術を社会へ”、キーワードは“本格研究”であり、どうみても主流は産業や応用に結びつくような研究でしょう。しかし深津グループ長によれば“本格研究”とは、本来の基礎研究たる“第 1 種基礎研究”、研究成果を社会的産業的に活用するための“応用研究”、それらを円滑かつ有機的に橋渡しするための“第 2 種基礎研究”を統合した概念で、我々はその中の“第 1 種基礎研究”を担当するという位置づけになっているんだよ」ということらしいです。とりあえず日々研究をしているなかで、「もう少し応用的な研究をして欲しい」というような圧力や雰囲気を感じることは皆無です。

結び：つくばは「研究者の楽園」？

私が産総研に移る前、「つくばは何もなくつまらない街だ」とか「つくばに籠

ると気が滅入るぞ」という意見を多く耳にしました。しかし、移り住んで 1 年が経過し、これほど研究環境と生活環境のバランスがとれた街は、日本国内に他にないのではないかと思います。

国立科学博物館の実験植物園や、産総研に隣接する洞峰公園に代表されるように、つくばには大小無数の緑地が存在します。10km ほど北に足を伸ばせば筑波山があり、登山や自転車でのスポーツを楽しむことができます。また、様々な国の料理を楽しめる食堂やカフェ、そしてうまい酒を出す飲み屋が所々にあり、ときに研究で疲れた心身をほぐしてくれます。

そして、なんと言ってもつくばの魅力は、多様な分野の研究者が集まっている点ではないでしょうか。無数の独立行政法人の研究機関と筑波大学をはじめとする大学が林立し、日本で最も研究者人口の多い街が形成されています。個人の姿勢次第で、様々な分野の研究者と交流を深め、刺激しあうことができるかと思えます。

引用文献および関連プレスリリース等

Hosokawa T, Kikuchi Y, Shimada M, Fukatsu T (2007) Obligate symbiont involved in pest status of host insect. Proc. R. Soc. B 274, 1979-1984.

産総研プレスリリース (2007) 「共生細菌による昆虫の害虫化の発見」
http://www.aist.go.jp/aist_j/press_release/pr2007/pr20070613/pr20070613.html

Kutsukake M, Shibao H, Uematsu K, Fukatsu T (2009) Scab formation and wound healing of plant tissue by soldier aphid. Proc. R. Soc. B 276: 1555-1563.

産総研プレスリリース (2009) 「昆虫による植物組織の修復・再生現象の発見」
http://www.aist.go.jp/aist_j/press_release/pr2009/pr20090225/pr20090225.html

Futahashi R., Fujiwara H. (2008) Juvenile hormone regulates butterfly larval pattern switches. Science 319: 1061.

むしむしコラム・おーどーこん (2008) 「アゲハ幼虫の紋様の切り替えは

幼若ホルモンに制御されていた」
<http://column.odokon.org/2008/0415234500.php>



グループ長の日本学術振興会賞受賞を記念して

事務局報告

2008年度第2回個体群生態学会運営委員会報告

日時：2008年10月18日(土)9時30分～

場所：東京大学農学部6号館1階セミナー室

参加者：大串・巖佐・粕谷・鎌田・河田・齋藤・嶋田・曾田・津田・椿・松田・宮竹・山村・山内(事務長)

1：報告事項

(1)事務局報告：山内事務長より予算の修正の報告があり、2008年予算の修正版を総会に提案することが認められた。

(2)Population Ecology 編集事務局報告：編集事務局の齋藤編集委員長より、Population Ecology の編集について報告があった。新しい編集委員が認められた。

(3)生物科学学会連合連絡会報告：鎌田委員より、生物科学学会連合の連絡会の内容について報告があった。

2：審議事項

(1)学会の法人化について議論し、状況を慎重に見守りながら法人化に向けての取り組みを進めることが承認された。

(2)Population Ecology の出版について、シュプリンガーの新たなサービス(MyPublication)の導入に関して審議し、これを受け入れることが承認された。

(3)2009年度以降の大会に審議し、2009年度については10月に関西地区で開催することになった。

(4)会報66号の編集を鎌田委員が行うことが承認された。

(5)Population Ecology のロゴマークと学会のロゴマークを決定した。

(6)京都大学生態学研究センターの全国共同利用施設への申請に関わるサポートレターについて審議し、サポートレターを送付することが承認された。

事務長・山内淳

2008年度個体群生態学会総会報告

日時：2008年10月19日(日)16時45分～17時45分

場所：東京大学農学部1号館

1：会長挨拶

2：報告事項

(1)事務局報告：山内事務長より、昨年度からの事務局報告がなされた。

(2)Population Ecology 編集事務局報告：齋藤編集委員長より、Population Ecology の編集・投稿状況について報告がなされた。

3：審議事項

(1)2007年度決算の承認

全会一致で承認された。

(2)2008年度予算の承認

予算の修正案が提案され、全会一致で承認された。

(3)学会の法人化について議論がなされ、情勢を見守ることが承認された。

(4)Population Ecology のロゴマークと学会のロゴマークが承認された。

(5)次期年次大会を京都で行なうことが承認された。

(6)京都大学生態学研究センターの全国共同利用施設への申請に関わるサポートレターを送付することが承認された。

事務長・山内淳

2008年度個体群生態学会会計監査

日時：2009年4月22日 11:00～12:00

場所：京都大学農学研究科

出席者：大澤直哉(監査委員)・加藤真(監査委員)・西田隆義(事務長)・山内淳(前事務長)

2008年度会計決算書類の監査が行われ、適正に会計が行なわれたことが認められた。

事務長・西田隆義

2009年度第1回個体群生態学会運営委員会報告

日時：2009年5月17日 13:30-17:30
場所：京都大学農学部総合館 E103 室
出席者：巖佐・大串・粕谷・鎌田・斎藤・嶋田・曾田・津田・松田・山内・西田（事務長）
欠席者：宮下・宮竹・河田

1：報告事項

(1) 事務局報告：山内前事務長より、学会選挙結果、会計監査の終了、事務局の引き継ぎ、奨励賞の応募状況等について報告がなされた。

(2) PE 編集事務局報告：斎藤編集長より *Population Ecology* 誌編集の現状について、発行状況、論文採択状況、投稿者の地域別分布等の報告があった。

(3) 第66号会報報告：鎌田委員より会報編集状況について報告があった。

(4) 2008年学会大会報告：嶋田委員より、参加者数、ポスター発表数、ポスター賞、企画および公募シンポジウム等について、報告があった。また、今後の大会開催の際に利用できるように、大会の記録を残すことが合意された。

(5) 2009年学会大会準備状況：大串委員より、学会大会の準備状況について（日程・開催地・企画および公募シンポジウム等）報告があった。

2：審議事項

(1) 2008年度決算が承認された。

(2) 2009年度予算が一部修正の上承認された。

(3) *Population Ecology* 誌の編集事務について審議し、オンライン図表のカラー化に伴う編集費増額、および専門分野の強化のため岸田治氏を編集委員に追加することを決めた。学会所有のバックナンバーを効率的に管理するために、新たな管理方法について審議した。

(4) 奨励賞：鎌田委員より審査結果について報告があり、審議の結果、瀧本岳氏を受賞者とすることを決めた。奨励賞の応募が増えることと審査の効率化のために、細則を変更して応募の簡略化と締め切り日時を変更することが合意された。また、選考委員の入れ替えについて

審議された。

(5) 法人化：山内委員および大串前会長から現状についての説明があり、これに基づいて議論を行った。

(6) 2010年度大会について、松田委員を中心として関東地区の会員が担当することになった。

(7) 会則の変更について審議し、会長は2年一期のみで再選を禁ずること、および運営委員の連続3選を禁ずることなどが合意された。これらの合意に基づいて必要があればさらに会則の細部を調整することになった。運営委員会など学会運営について審議した。

(8) 会員名簿の作成、メーリングリストの運営方法、ウェブサイトの運営、および学会の将来のあり方について審議した。

事務長・西田隆義

個体群生態学会会報65号に掲載された2008年の一般会計の予算案に誤りがありました。ここに、2008年度総会で承認された修正案に掲載します。

個体群生態学会2008年度予算書 (2008年4月1日～2009年3月31日)

一般会計

収入の部

単位:円

科 目	予算額	備 考
会費	2,178,550	国内正会員(一般) 289人 x 8,000円 x 0.8 1,965,200 国内正会員(学生) 39人 x 4,000円 x 0.8 98,600 国外正会員 27人 x 5,000円 x 0.1 114,750
会誌電子ジャーナル利用料	351,893	Springer Japan 2007年分 (10%源泉徴収済み)
利子収入	100	
雑収入	50,000	学術著作権協会複写使用料他
特別会計より繰入れ	1,000,000	
小計	3,580,543	
前年度繰越金	3,978,689	
合計	7,559,232	

支出の部

単位:円

科 目	予算額	備 考
会誌刊行費	1,669,500	Springer Japan 2008年分
会誌編集費	900,000	
会報編集費	60,000	会報 No.65
会報印刷費	140,000	会報 No.65
事務委託費	600,000	土倉事務所
印刷・通信費	450,000	選挙費用(印刷・通信費)15万円を含む
事務長事務費	40,000	
旅費	300,000	運営委員会他
予備費	300,000	税理士顧問料ほか
小計	4,459,500	
次年度繰越金	3,099,732	
合計	7,559,232	

資料 1-1

2008年度個体群生態学会
収支決算報告書
(2008年4月1日～2009年3月31日)

一般会計

収入の部

単位：円

科 目	予 算 額	決 算 額	備 考
会費	2,178,550	2,565,000	国内正会員（一般）2,371,000 国内正会員（学生）186,000 国外正会員 8,000
電子ジャーナル利用料	351,893	351,893	2007年度分
利子収入	100	2,014	
雑収入	50,000	47,002	学術著作権協会複写使用料他
2008年度年次大会よりの還元金		400,500	
特別会計より繰入れ	1,000,000	0	
小計	3,580,543	3,366,409	
前年度繰越金	3,978,689	3,978,689	
合計	7,559,232	7,345,098	

支出の部

単位：円

科 目	予 算 額	決 算 額	備 考
会誌購入費（会員用）	1,669,500	1,669,500	Springer Japan 2008年分
会誌編集費	900,000	909,400	
会報印刷費	140,000	75,040	会報 No. 65
会報編集費	60,000	0	会報 No. 65
事務委託費	600,000	613,500	土倉事務所
印刷・通信費	450,000	366,325	選挙費用（印刷・通信費）15万円を含む
事務長事務費	40,000	3,060	
旅費	300,000	198,210	運営委員会他
予備費	300,000	73,756	税理士顧問料ほか
小計	4,459,500	3,908,791	
次年度繰越金	3,099,732	3,436,307	
合計	7,559,232	7,345,098	

資料 1-2

2008年度個体群生態学会
 収支決算報告書
 (2008年4月1日～2009年3月31日)

特別会計

収入の部

単位：円

科 目	予 算 額	決 算 額	備 考
利子収入	7,000	7,656	
小計	7,000	7,656	
前年度繰越金	5,749,105	5,749,105	
合計	5,756,105	5,756,761	

支出の部

単位：円

科 目	予 算 額	決 算 額	備 考
雑費	0	0	
一般会計に繰入	1,000,000	0	
小計	1,000,000	0	
次年度繰越金	4,756,105	5,756,761	
合計	5,756,105	5,756,761	

資料 2-1

個体群生態学会
2009年度予算書
(2009年4月1日～2010年3月31日)

一般会計

収入の部

単位:円

科 目	予算額	備 考
会費	2,221,900	国内正会員(一般) 294人 x 8,000円 x 0.8 1,999,200 国内正会員(学生) 53人 x 4,000円 x 0.8 180,200 国外正会員 10人 x 5,000円 x 0.8 42,500
利子収入	1,000	
雑収入	50,000	学術著作権協会複写使用料他
小計	2,272,900	
前年度繰越金	3,436,307	
合計	5,709,207	

支出の部

単位:円

科 目	予算額	備 考
会誌刊行費	1,060,500	Springer Japan 2009年分 (1,010,000円+税金)
会誌編集費	1,000,000	
会報編集費	120,000	会報 No.65・66
会報印刷費	140,000	会報 No.66
事務委託費	600,000	土倉事務所
印刷・通信費	300,000	
事務長事務費	40,000	
旅費	300,000	運営委員会他
個体群生態学会奨励賞副賞	100,000	
予備費	100,000	
小計	3,760,500	
次年度繰越金	1,948,707	
合計	5,709,207	

資料 2-2

個体群生態学会
2009年度予算書
(2009年4月1日～2010年3月31日)

特別会計

収入の部

単位:円

科 目	予算額	備 考
利子収入	7,000	
小計	7,000	
前年度繰越金	5,756,761	
合計	5,763,761	

支出の部

単位:円

科 目	予算額	備 考
雑費	0	
一般会計へ繰入れ	0	
小計	0	
次年度繰越金	5,763,761	
合計	5,763,761	

Population Ecology 編集報告

第50巻(2008年)は論文総数40本、427ページで発行しました。編集は大変順調に進んでおり、掲載論文の引用も増加しています。インパクトファクターは2007年~2008年にかけて大きく上昇し、2008年は1.895になりました。第51巻(2009年)の編集、発行も順調に進んでおり、すでに4号分すべての入稿が完了しています。論文総数50本、540ページ程度で発行する予定です。会員の皆さまのご協力に感謝します。

投稿状況

別表のように、2008年の投稿論文数の合計は134本(うち特集論文は22本)で、2007年の124本から順調に増加しました。地域別に見ると欧州が27.6%と最も多く、次いで日本(25.4%)、アジア(18.7%)、北米(11.2%)、と続きました。投稿先の合計は34カ国でした。欧州と日本からの投稿が多いことは2007年と同様でしたが、中国からの投稿が少し増え、北米とアジアの順位が逆転しました。2009年もすでに59本(うち特集論文は8本)の投稿がありました。投稿論文数は最終的には、2008年と同程度になると思われます。

特集論文を除いた一般投稿論文の受理率は平均で36%(2008年)でした。地域による変異が高く、日本と北米からの論文の受理率は高く(50%以上)、欧州の論文は平均的、アジア(日本を除く)、アフリカ、南米からの論文の受理率は低くなっています。

審査の迅速化

2008年に受け付けた論文のうち68.7%(92編)は60日以内に1回目の審査を終え、著者にその結果を伝えました。90日以内には89.6%(120編)の論文の1回目の審査を終えました。1回目の審査終了までの平均日数は47.7日でした。2007年の平均日数は52.0日でしたので、

若干改善されましたが、「80%の原稿の審査(1回目)を60日以内に終える」という目標には届きませんでした。さらに審査の迅速化に努めたいと思います。

審査の迅速化には査読者の協力が不可欠です。査読を担当された場合はどうか1日でも早く、審査結果を報告くださいますようお願いいたします。

特集

第50巻(2008年)では特集を1本しか組めませんでした。第51巻(2009年)では2本になりました。このうち、第51巻3号はすべて特集論文で構成されており、「特集号」となりました("Mate-location failure, the Alee effect, and the establishment of invading populations"). 今後、このような大型の特集(特集号)の発行にも積極的に取り組んでいきたいと思えます。

オンラインの利用状況

Population Ecologyは世界の5,501研究機関でオンライン購読されています。様々な情報の電子化が進む中で論文のオンライン利用が劇的に増え、Springer-Linkを通じたPopulation Ecology掲載論文のダウンロード数は2007年から2008年にかけて2倍以上に増加しました(2008年は45,036回)。Springer社はオンライン利用の強化を進めており、様々なキャンペーンを展開しています。今後、科学雑誌は引用数の他にダウンロード数によっても評価されるように思われます。会員の皆さんもどうぞ積極的にオンラインからPopulation Ecologyをご利用ください。

編集長・齊藤 隆

Population Ecology 編集報告 (2009年6月22日現在)

2008年分

投稿

受理	24	37	61
棄却	10	62	72
未決	0	1	1
取り下げ	0	0	0
合計	34	100	134
受理率	70.6%	37.4%	45.9%

原稿種別 (2008年分)

	原著	総説	特集	合計
受理	40	0	21	61
棄却	70	1	1	72
未決	1	0	0	1
取り下げ	0	0	0	0
合計	111	1	22	134
受理率	36.4%	0%	95.5%	45.9%

投稿 (2009年分: 6月22日現在)

	国内	国外	合計
受理	2	7	9
棄却	3	26	29
未決	4	17	21
取り下げ	0	0	0
合計	9	50	59
受理率	40.0%	21.2%	23.7%

原稿種別

	原著	総説	特集	合計
受理	5	0	4	9
棄却	29	0	0	29
未決	17	0	4	21
取り下げ	0	0	0	0
合計	51	0	8	59
受理率	14.7%		100%	23.7%

インパクトファクター

2003	2004	2005	2006	2007	2008
0.967	0.921	1.424	1.534	1.314	1.895

個体群生態学会会則

第1章 総則

第1条 (名称) 本会は個体群生態学会 (The Society of Population Ecology) と称する。

第2条 (目的) 個体群生態学の進歩発展を促し、基礎および応用各分野の研究者間の連絡、協力をはかることを目的とする。

第3条 (事業) 本会は前条目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 会誌 ‘Population Ecology’ の発行
- (2) 会報 ‘個体群生態学会会報’ の発行
- (3) 研究集会、シンポジウムなどの学術的会合の開催
- (4) 内外の関係ある諸学会、諸機関との連絡
- (5) 個体群生態学会奨励賞等その他必要な事業

第4条 本会の事務所所在地は運営委員会で審議し、総会の承認をうけるものとする。

第2章 会員

第5条 (会員) 本会の会員は国内正会員、永年会員、海外正会員、賛助会員の4種類とする。

- (1) 国内正会員は本会の趣旨に賛成し所定の会費を納めた国内在住の個人で、会誌、会報の配布を受ける。
- (2) 永年会員は本会の趣旨に賛成し会員歴30年以上70歳以上の個人で会費を免除され会誌、会報の配布を受ける。
- (3) 海外正会員は本会の趣旨に賛成し所定の会費を納めた海外在住の個人で会誌の配布を受ける。
- (4) 賛助会員は本会の趣旨に賛成し所定の会費を納めた個人または団体で会誌の配布を受ける。

第6条 (入会) 本会に入会を希望するものは所定の入会申し込み用紙に必要事項を記入し、その年度の会費を添えて本会事務所に申し込まねばならない。

第7条 (退会) 会員で退会しようとするものは、その旨本会事務所に申し出なければならない。

第8条 (義務) 会員は本会会則を守らなければ

ならない。会費は前納制とする。3年間会費を滞納した場合は退会したものとみなす。

第9条 (権利) 会員は次の権利を持つ。

- (1) 国内正会員は1) 研究集会にその業績を発表できる。2) 会長、運営委員の選挙権、被選挙権を持つ。3) 研究集会、シンポジウムなど本会が行う学術的会合に出席することができる。4) 総会に出席し意見を述べることができる。
- (2) 永年会員は、永年会員になる前の権利を保持する。
- (3) 海外正会員は研究集会にその業績を発表できる。
- (4) 賛助会員は研究集会、シンポジウムなど本会が行う学術的会合に参加することができる。

第3章 役員

第10条 本会に次の役員をおく。

会長1名、運営委員12名、編集委員約20名、会計監査委員2名、事務長1名。

第11条 会長は本会を代表し会務を統べる。任期は2年で連続3選を禁ずる。

第12条 運営委員の任期は2年で重任を妨げない。

第13条 (会長、運営委員の選挙)

- (1) 会長、運営委員は国内正会員の互選によって選ばれる。
- (2) 会長は単記、運営委員は12名連記(いずれも無記名)投票で同時選挙を行う。
- (3) 運営委員上位12名以内に会長が含まれる場合は13位者を当選とする。
- (4) 下位同票の場合は、役員未経験者、若年者の順で当選とする。
- (5) 選挙は任期満了年の年度に行う。
- (6) 任期中に欠員が生じた場合には次点者をくり上げるものとする。

第14条 (編集委員長、編集委員の選出)

- (1) 編集委員長は運営委員会の上承を経て、会長が委嘱する。任期は2年で重任を妨げない。
- (2) 編集委員は編集委員長が指名し、運営委員会の上承を得て会長が委嘱する。編集委員

は会誌の編集、刊行に関する評議を行う。
任期は2年で重任を妨げない。

第15条 会計監査委員は運営委員会により選出され、会計監査を行う。任期は2年で重任を妨げない。

第16条 事務長は事務一般を執行する。運営委員会の了承を得て会長が委嘱する。任期は2年で重任を妨げない。

第4章 運営委員会

第17条 本会に運営委員会をおく。運営委員会は会の運営方針を審議する。ただし緊急事項は総会に代って決定することができるが、次回総会において承認を得なければならない。運営委員会は会長が必要に応じて召集する。

第18条 運営委員会は、会長と運営委員により構成される。

第19条 運営委員会の議長は、会長が務める。

第20条 運営委員会の定足数は、運営委員会構成員の3分の2とする。

第21条 運営委員会の議決は、運営委員会出席者の過半数による。可否同数の時は議長が決する。

第5章 総会

第22条 総会は会の最高議決機関であり、会務、会計そのほか重要事項を議決する。総会は会長が招集し、原則として1年に1回開催する。ただし運営委員会の了承を経て臨時総会を開催することができる。

第23条 総会の議決は出席者の過半数による。可否同数の時は議長が決する。

第6章 会計

第24条 本会の経費は会費その他の収入でまかなわれる。会費の年額は運営委員会の審議を経て総会の決議によって定める。

第25条 本会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

第26条 会長は会計年度間の収支決算を運営委員会に報告して承認を受けなければならない。また過去1年間の決算を総会で報告しなければならない。

第7章 雑則

第27条 会則の変更は運営委員会の議を経て総会の議決によって行う。

第28条 本会則は1981年11月12日より実施する。(1983年11月11日、1984年11月10日、1986年12月4日、1993年10月2日、1997年10月25日、1999年10月23日、2001年10月27日、2004年9月1日、2005年10月29日、2006年11月19日一部改定)

(附 則)

第1条 会費は年額下記の通りとする。

国内正会員 (一般8,000円、学生4,000円)

海外正会員 5,000円

賛助会員1口 30,000円(1口以上)

第2条 本学会の事務所は、〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8 土倉事務所内に定める。

会員異動

個人情報保護法に鑑み、個体群生態学会会報のWeb版では会員の異動情報を公開しておりません。

会員情報変更の際の連絡のお願い

メールアドレスの変更も含め、会員情報に変更があった場合には、個体群生態学会の Web サイトの「会員手続」を通じて必ずご連絡ください。

編集後記

2008年のNo.65に続き、会報の編集を引き受けることになりました。

昨年から、大会の形式が変わり、通常の学会と同じ形式になりました。おおかたの参加者には公表のようです。個体群生態学会の会員増と発展に繋がることを期待しております。

以前のような重厚な企画ではありませんが、会報改革以降続いている研究室紹介に加え、新シリーズとして「研究機関における個体群生態学分野の研究紹介」を前号よりはじめました。本郷では2本の紹介があります。

今回は、書評がありませんが、会報では、書評依頼のあったものについて、学会員に周知して書評原稿を依頼し、会報に掲載しております。本を書かれた場合などには、積極的にご利用下さい。

一方で、2005年に起こった学会事務センターの破綻問題、文科省の科研費補助金の補助方針の変換による落選など、ここ数年の間に、個体群生態学会のような小規模の学会を取り巻く状況が大きく変化しました。これらに対する対応についてはすでに既刊の会報において報告されておりますが、個体群生態学会では、文科省の科研費補助金に頼らない財政基盤を作り上げていくことにしました。そのために、PE誌の発行を会費に頼らずに行える体制作りを進めています。また、法人化制度の改定に伴う法人化についても重要な検討事項になっています。

また、コスト削減のひとつの方法として、電子メールの積極活用が、運営委員会で提起されました。会員の皆さまにも趣旨を理解いただき、メールアドレスの登録を、今一度ご協力いただければと思います。

お気づきの点等ありましたら、何なりと会報編集担当の鎌田直人まで連絡いただければ幸いです。

(東京大学農学生命科学研究科附属演習林
鎌田直人)

個体群生態学会への連絡先

1. 退会・住所変更・会費納入に関する問い合わせ先

〒603-8148

京都府京都市北区小山西花池町1-8

(株)土倉事務所内 個体群生態学会

TEL 075-451-4844

FAX 075-441-0436

郵便振替口座

口座番号 : 00950-6-97521

口座名称 : 個体群生態学会

メールアドレスの変更も含め、会員情報に変更のあった場合には、必ず土倉事務所に連絡をお願いいたします。

2. その他の学会業務に関する問い合わせ先

〒606-8502

京都市左京区北白川追分町

京都大学農学研究科昆虫生態学研究室

個体群生態学会 事務長 西田隆義

TEL 075-753-6475

FAX 075-753-6474

個体群生態学会会報 No.66

2009年6月30日印刷

2009年6月30日発行

発行 個体群生態学会

〒603-8148

京都府京都市北区小山西花池町1-8

(株)土倉事務所内

印刷 (株)サガプリンティング

〒849-0936

佐賀市鍋島町森田909番地

TEL 0952-34-5100

FAX 0952-34-5200